



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	予科. 序 永遠の幸、朽ちざる誉(予科成立まで). 一 人の世の清き国ぞとあこがれぬ(一九〇七年から一九一七年まで). 二 しじまに曳けるおもいでよ(一九一八年から一九二六年大正時代の終わりまで). 三 強く正しく友よ生きなむ(一九二七年から一九三五年まで). 四 我が行く孤影よ霜に凍りぬ(一九三六年から一九四五年敗戦まで). 五 魂ゆるする生命の饗宴(敗戦から予科の消滅まで). 結 告ぐるなりいたき別れを(予科の終末). あとがき. 付録. 年表
Citation	北大百年史, 部局史, 1-63
Issue Date	1980-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29947
Type	departmental bulletin paper
File Information	bukyokusi_p1-63.pdf



予

科

目次

序 永遠の幸、朽ちざる誉（予科成立まで）	5
一人の世の清き国ぞとあこがれぬ（一九〇七年から一九一七年まで）	6
構成―都ぞ弥生―恵迪寮生の生活と自治―桜星会と課外活動	
二 しじまに曳けるおもいでよ（一九一八年から一九二六年大正時代の終わりまで）	11
構成―桜星会の発展―恵迪寮自治の動搖―陸軍現役将校学校配属令	
三 強く正しく友よ生きなむ（一九二七年から一九三五年まで）	18
構成―生徒処分と発禁―桜星会部活動と応援団―恵迪寮の移転と寮自治の再建	
四 我が行く孤影よ霜に凍りぬ（一九三六年から一九四五年敗戦まで）	25
構成―入学試験―断髪令と勤労作業―桜星会三十周年と桜星報国団結成―繰り上げ修了と勤労 動員―敗戦前後―恵迪寮生活の制約―戦時下の部活動	
五 魂ゆるする生命の饗宴（敗戦から予科の消滅まで）	37
窮迫変則の学年暦―予科生の動き	
結 告ぐるなりいたき別れを（予科の終末）	43

あとがき

47

付 録

48

一 課程表

二 歴代予科教官名簿

三 予科卒業及び修了者数

年 表

59

序 とこしえ 永遠の幸、朽ちざる誉 さち (予科成立まで)

札幌農学校は、一八九九年(明治三二)北一条から北八条西六丁目への移転を開始し、一九〇三年には新校舎が竣工し、寄宿舎も現在の教育学部付近に一九〇五年四月に新築落成をみた。これは南北二寮から成り、百二十人余を収容できるものであった。寄宿舎の自治制は、すでに一八九九年に認められており、自治確立の努力が重ねられていた。ちょうどこの時期に、北海道帝国大学設立の運動が起こり、一九〇七年に東北帝国大学農科大学として、いちおうの実現を見るに至った。以下に述べる予科とは、農科大学となつてからの予科であつて、農学校時代に存した予科や予修科を指すものではない。

予科の構想は、一八九九年六月に作られた北海道帝国大学設立建議中の帝国大学予科官制案の「説明」において端的に表現されており、また事実そのようにして予科は成立するに至った。予科の構想は「説明」において三点に集約されている。第一に、帝国大学予科官制案は高等学校大学予科第二部にのつとること。第二に、北海道帝国大学設立とともに高等学校大学予科の建設を要するが、これは容易なことではないので、当分北海道帝国大学内に大学予科を置く方法を探ること。第三に、札幌農学校には現に二年課程の予修科があるので、これを一年延長すれば好都合であること。以上の三点であるが、右に言う高等学校大学予科第二部とは、一八九四年の高等学校令を念頭に置くものである。すなわち、この法令によると、高等学校には医、法、工の専門部のほかに大学予科を置くことができると規定されており、さらに、大学予科第二部とは工、理、農等の諸学を修める者の予備課程を指すのである。いわゆる旧制

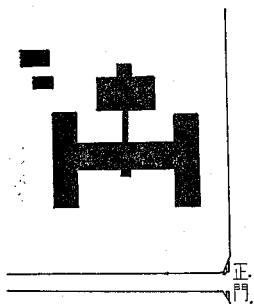
高等学校において、実際にその主体となったのはこの大学予科であったことは改めて言うまでもない。大学予科第二部は第三部（医学の予備課程）とともに一九一八年（大正七）の改正高等学校令では高等学校高等科の理科となる。本学予科成立後、予科規則改正が何度か行われているが、その改正はその都度の高等学校令改正に追隨している。

農科大学になる直前、一九〇七年二月には校則改正により学生生徒保証人制度が廃止された。寄宿舎においては同年四月、舎名を恵迪寮（けいとい）と定め、最初の寮歌「一帯ゆるき」が作られ、八月には寮は本科生と予科生のみを収容することとされた。

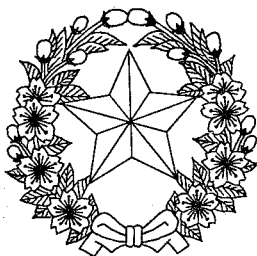
一 一人の世の清き国ぞとあこがれぬ（一九〇七年から一九一七年まで）

構 成

一九〇七年（明治四〇）九月十一日、東北帝国大学農科大学の開校式が挙行された。附属大学予科の生徒定員は各学年一〇〇人、三学年合計三〇〇人とされたが、発足時の予科は、従来の予修科の二年、一年を修了した者を、新設予科の三年生、二年生とし、新たに予科一年に入学した者を加えて三学年を構成した。一九〇七年十月末日現在、三年四一人、二年四三人、一年は新入学生と予修科よりの編入者とを合わせて一一一人であった。予科生は札幌農学校の校章たる桜星章を引き継いで、これを丸帽につけた。発足時の予科教師は、予科主任心得の青葉萬六以下、新居敦二郎、高杉栄次郎、森本厚吉、齋藤米蔵、秋元喜久雄、武田久吉、吹田順助、平野他喜松、三田村孝吉、鈴木庄次郎、辻卓爾、池田嘉吉、山内義人、鈴木貞三郎、内海虎雄、津田広助、ジョン・B・モルガンの一八人であった。予科校舎はできていなかったため、寮の南にあった雨天体操場、植物標本庫の裏にあった水産教



1908年の予科校舎

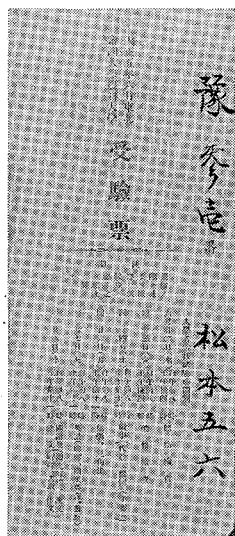


桜星章

室で授業を行った。最初の学科課程は付録別表（課程表A）のように定められており、第一外国語を英語とする者と独語とする者とはに分け、一学年一〇〇人をA・B・Cの三組に編成した。

一九〇八年（明治四二）七月四日には、早くも予科第一回卒業生三六人を送り出し、同年十二月には予科講堂つまり予科の校舎が大学正門を入ってすぐ右側の位置に落成した。なお、予科校舎には土木工学科（後の土木専門部）が同居しており、一九二九年（昭和四）に土木専門部校舎ができるまで、この同居は続いた。一九〇八年九月から溝淵進馬が予科主任となり、一九一一年九月から渡辺又次郎がその後を継いだ。このころ二度にわたって学科課程が改正されて

いる。すなわち、一九〇九年の改正は別表（課程表B）のとおりで、時間配当の修正のほかに、外国語の履修法が変わり、選択制が廃されて英独二カ国語必修となった。独語の時間数が英語よりも幾分か多く、また特に、一年生においては、両外国語の授業時間は全授業時間のほぼ半分に及んでいる。一九一〇年十一月一日付けの文部省令によって、一九一一年度から倫理は修身と改称される。一九一四年（大正三）九月から、一年生の数学を一時間削って四時間とし、新たに歴史、論理、ラテン語が随意科目（事実上は必修に近い扱い）として加えられた。すなわち、一年生は歴史二時間、三年生は論理かラテン語の一つを一時間受講するしくみである。この改正は、農科大学における教育の予備として、また、学生の教養向上のためとして行われた。同じ一九一四年から予科生の帽子に白線三条を巻くことになった。



1916年の受験票

都ぞ弥生^{やよい}

一九一二年（明治四五）四月に恵迪寮寮歌「都ぞ弥生」（横山芳介^{よしかず}作詞、赤木頭次作曲）が生まれ、

やがて全国に知られる北大の代表歌となり、この寮歌にひかれて、はるばる札幌に遊学する者の数は年を追って増加した。以後歴代の寮歌が北国の自然のうつろいを歌いこんでいるのも「都ぞ弥生」の影響であろうか（記念の歌碑は横山の親

友樋口桜五の提唱によって一九五七年恵迪寮の脇に建てられた）。

科
予
小冊子である。

一九一六年（大正五）に橋本左五郎・有島武郎両教授の序文をいただいて寮歌集が発行され、以後これを原型として、毎年新寮歌を加え、校歌、桜星会歌、開校記念歌等を網羅する寮歌集が刊行された。一九〇三年（明治三六）に札幌農学校に入学し、後に予科教授となった鈴木限三は「日本中私の学ぶべき自由の学校は、ここだけと思った。高等学校などは考えたこともなかった」と書いていて、しかも彼は、農学を学ぶ気はまったくなかったとも言っている。彼は内村鑑三の影響を受け、最も純粋に「人の世の清き国」をあこがれた一人であった。予科史を一貫して毎年の新入生は、入学直後「本学は保証人を要せず、今から諸君を紳士として遇する」と訓示され、一種の感動を覚えて予科生活に入っていた。もっとも、紳士の実態については、個々人において、また時代の変遷につれて、おのずから相違が見られるはずである。

一九一三年（大正二）に寮生の一人が紅燈の巷におぼれ、それが新聞種となった。寮では委員総辞職と血判の宣言の

可否をめぐって激論となり、委員長は辞任し、有島教授の忠告もあつて血判には至らなかったが、自戒結束を誓う寮宣言を発表した。学風の擁護者をもつて自任する寮生の氣迫を示したものと見えよう。一九〇七年予科入学者の中には、高校入試に失敗した浪人が多かったと伝えられている。また大正中期まで農学を志望して入学した者は少なかったとも言われている。

平均の素質を一概に推量することはできないが、一九〇七年の一年生一一一人が一九一〇年七月に四八人しか卒業していないという数字は、予科史を通じて異例の最多落伍率を示している。独語では吹田順助・佐久間政一両教授、英語では有島武郎教授らが語学を通じて文学と人生を教えた。予科には「理科用語学」という近視眼的教育は最後まで存在しなかった。予科主任溝淵進馬は休日に寮生を遠足に誘い出し、体育を奨励し、自分も兵式体操に参加し、生徒とともに教練を受けた。

恵迪寮生の生活と自治

恵迪寮には一九〇五年（明治三八）の開舎以来、先輩に当たる若い教師が寄宿舎係として、寮に住み込んで後輩を指導した。初代は半沢洵、続いて森本厚吉、有島武郎、高松正信、田中義麿、吉田新七郎がその任に当たり、一九一一年十月までこの制度が続いた。また、本科生が寮運営を堅持した。長年にわたり不良賄人に苦しんだので、一九〇八年六月から自炊制度を実施し、委員が会計、献立、使用人の雇用監督に当たった。つまり、食堂の自主管理運営である。一九一七年（大正六）には購買部自営にまで至っている。

寮生原田三夫、藍野祐之らは有島教授を中心として絵画の会「黒百合会」を作り、一九〇八年秋に第一回展覧会を開催した（一九二五年に文武会的美術部となる）。寮内での文学批評の集まりである凍影社は一九二二年二月に生まれ、一九一四年五月に解散したが、佐久間教授は終始熱心に指導した。同時期に寮内誌『こがし辛夷』が五回発行され、これが凍影社同人の発表の場であった。また、札幌農学校以来の開識社が引き継がれ、弁論、啓蒙の場となっていたが、一九

一二年十一月、寮の先輩坂村徹の講演「遺伝性質の運搬者」は一大収穫と言われている。

桜星会おとせいと課外活動

学内には札幌農学校以来の文武会があり、予科生も全員その通常会員であった。しかし、学生徒の半数を占める予科の団結が意図され、一九一一年（明治四四）九月三十日、新入生歓迎会の席で、予科生今見昇の提案があつて、十月には予科の教官生徒の懇親と団結を目的とする桜星会（名称は青葉萬六教授の案）が成立し、渡辺又次郎予科主任が初代会頭となつた。初期の桜星会は後年の桜星会各部の活動とは異なり、新入生歓迎会、修学旅行、懇親会、卒業生送別会を行う程度であつたが、師弟の交流はきわめて親密であつた。一九一二年に最初の桜星会歌「あらうれし」（横山芳介作詞、柳沢秀雄作曲）が作られた。一九〇八年に独語教師として着任したスイス人ハンス・コラーは、すぐに日本語の習得に努め、まもなく達者に日本語を話すようになった。そして、明治末期に独語の学生歌“Studentenlied”を作り、生徒に教えた。ある日、予科校舎の一角から異様な奮声合唱がとどろきわたつた。コラー教師に指導され予科生が声を張り上げて合唱しているのであつた。この歌には兎狩り、運動会、コンパ、試験、落第など学生生活の一年が巧みに歌い込まれていて、當時をほうふつさせる。

予科生の文化・運動両面の活動は、文武会の各部に属して行われた。一九一一年に小樽高等商業学校が開校され、翌年五月二十五日に野球の対校試合が行われた。試合種目は逐年増加し、対高商戦は全予科生の熱中する恒例行事となつた。野球部は大正前半期まで道内に比肩するものがなく、野球の普及に貢献した。コラー教師は独語の教材にスキー教本を取り上げ講釈した。予科生はコラー所持のスキーによって、また馬橋屋にスキーを試作させ、学内の斜面で練習を始めた。本邦スキーの草分けは予科生による。一九一一年一月、オーストリアの軍人レルヒが新潟県高田の第一三師団においてスキー術を教え、翌年二月旭川の野砲兵第七連隊付となり、同年三月には札幌の歩兵第二五連隊においてスキー講習を行ったが、これに参加した北大生七人はすべて予科生であり、同年六月には文武会スキー部の創

設をみた。学生監橋本左五郎は物理学用品として陸軍省からスキー若干の払い下げを受け、寮生の練習に供した。

一九一三年(大正二)大晦日、本科に進んだばかりのスキー部員柳沢秀雄ら三人は、冬の富士登山を敢行し、翌日元旦に山頂を極めた。ノルウェーに留学した水産科教授遠藤吉三郎は一九一六年に複杖のノルウェー式スキーを持って帰学した。やがては複杖スキーが普及するが、大正中期までは、単杖の方が優勢であった。一九一七ごろ、予科生大矢敏範は独学でジャンプの練習に熱中していた。後、広田戸七郎、緒方直光らがジャンプ合宿に参加し、後年斯界の指導者となった。一九一八年には、本科に進んだばかりの福地義三郎、六鹿一彦らによって、本邦初のスキー手引き『スキー術教程』が出版され、翌年には、スキー山岳写真展を催し、スキーの普及に貢献した。札幌周辺からニセコ付近の諸山は次々にスキーによって踏破され、毎年、ニセコの青山温泉でスキー合宿が行われた。スキー部草創期にスキーに熱中した木原均は後、全日本スキー連盟の首脳として斯界に貢献する。

札幌農学校二期生新渡戸稻造が札幌に残した遠友夜学校は、太平洋戦争末期まで存続し、北大関係者の奉仕によって貧困子弟の教育に貢献したが、その教壇に立った者の過半は、熱意に燃え学力に余裕のある予科生であったことを特記しなければならない。

二 しじまに曳けるおもいでよ(一九一八年から一九二六年大正時代の終わりまで)

構 成

一九一八年(大正七)北海道帝国大学の独立をみ、翌年農科大学は農学部と改称され、同時に医学部が設置された。一九一八年四月より予科主任を予科主事と改め、渡辺又次郎が主事となり、一九二〇年四月から

青葉萬六主事の時代となる。一九一九年から予科生が増募され、入学定員は英語を第一外国語とする者八〇人、独語を第一外国語とする者一二〇人、計二〇〇人となり、組編成は英語A Bの二組、独語A B Cの三組とされた。さらに工学部の設置に伴い一九二二年から予科生二二〇人の増加となった。すなわち、農学部進入希望者は従来のまま英語を第一外国語とする組（通称英農 八〇人）と独語を第一外国語とする組（通称独農 四〇人）とに区分され、医学部進入希望者八〇人は独語を、工学部進入希望者一二〇人は英語を、それぞれ第一外国語とすることになった。したがって英語の組は五組、独語の組は三組となる。だが、一九二四年（大正一三）には農学部進入希望者一二〇人はすべて英語を第一外国語と改めたので、組編成は英語の組は六組、独語の組は二組となった。この時期から農、医、工の各学部に進入する者を、公式にはそれぞれ一類、二類、三類と称して募集入学させたが、一般には農学部予科とか工科予科とか通称され、さらに農類、医類、工類という呼称が定着してくる。

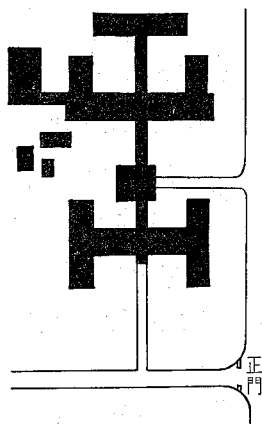
一九一九年九月改正の予科学科課程は別表（課程表C）のとおりで、これが一九三七年（昭和一二）まで施行される。測量、論理、ラテン語が消え、心理、法制経済が加わり、兵式体操が体操と改称された。また、第二外国語は履修しなくても卒業できるようにも読めるが、実際はどのように指導されたか明らかでない。一九二一年（大正一〇）から新学期が四月一日始まりとなり（従来は九月十一日）、在学中の予科生は一学期分切り上げとなったので、及落判定で大恐慌に陥った。一九二三年五月十五日に予科の呼称は北海道帝国大学予科となった。それまでは附属大学予科と称していたものである。

予科生の増加に伴い校舎の増築が行われた。すなわち一九一七年九月着工、一九一九年八月竣工の分と、一九二〇年八月着工、一九二一年六月竣工の分とである。これら木造校舎は一九六八年（昭和四三）から解体され姿を消した。恵迪寮も増築された。南寮が一九一九年四月着工、同年八月完成し、従来の南寮は中寮と改称された。北寮のさらに

北側に新寮が一九二一年六月着工、同年十月完成し、同時に食堂も増築されて「I」字形となり、収容数は二四〇人となった。本科生の寮生は少数であったが、予科生の増加によって、一九一九年から委員は予科生のみとなり、一九二二年六月から寮は予科生のみものとなった。寄宿舎規定も一九二六年十月一日付けで、「本学寄宿舎は予科生徒を寄宿せしむるものとす」と、現状を追認し改正された。

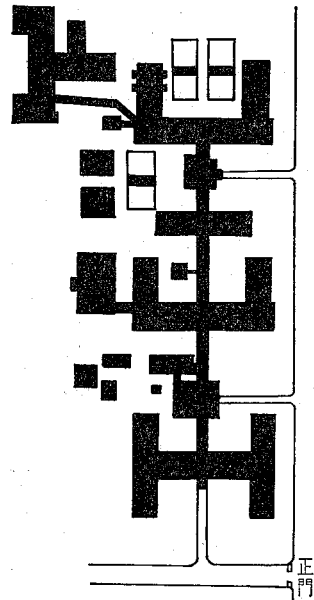
桜星会の発展

一九二〇年（大正九）九月桜星会会則が改正された。一九二一年の会則では予科の親睦を目的とするにとどまっていたが、この改正によって会員の意気及び校風の維持発揚をうたい、学芸部、武道部、運動部を置いた（一九二二年旅行部を加える）。一九二〇年の桜星会歌「環珞みがく」（佐藤一雄作詞、置塩奇作曲）は「都ぞ弥生」と並ぶ代表歌となった（東京同窓会の予科OB山口哲夫の提唱によって一九七〇年植物園に歌碑が建った）。学芸部は一九二三年に雑誌部と改称し、同時に弁論部、図書部が分立した。武道部の中に柔道、剣道、弓道、角力の各々が当初から存在した。運動部は野球、庭球、陸上運動部の三部から出発し、水泳部（一九二一年）、ア式蹴球部（以下サッカー部と書く、一九二三年）、ラグビー部（一九二五年）と増加する。旅行部は一九二〇年に松川五郎、板橋敬一、加納一郎らが作った恵迪寮旅行部に始まり、一九二二年に桜星会旅行部の設置に至ったが、両旅行部は一体であって、



1919年増築された
予科校舎

前者が事実上の核であった。文武会山岳部が一九二六年に発足するまで、スキー部山班の活動の延長として夏山登山が行われていたが、予科の旅行部は北大で初めての夏冬を通して本格的登山グループであった。文武会各部は桜星会各部と名称を同じくし（例外は山岳部と陸上競技部など）、予科で活動した者が学部に進んで文武会の主脳となり、予科生の指導者となった。桜星会応援団は一九二二年



1921年再増築された予科校舎

に組織された。初めは任意加入団体であったが多数の予科生が結集し、年とともにその活躍は異彩を放つようになる。

一九二一年ごろから各部は全国高校大会、全国高専大会に遠征を始めた。柔道部は一九二五年から毎年全国高専大会で活躍したが優勝には至らなかった。剣道部は一九二四年関東・東北・北海道高専大会で優勝。

弓道部は一九二二、二三両年優秀賞を得た。庭球部は一九二六年全国高専大会準決勝に進出。陸上運動部は山形高校、弘前高校などと互角以上の争いを演じた。一九一六年に予科に入学した内田正練まさよしは当時本邦第一級の泳者で、一九二〇年農学部一年の時、国際オリンピック大会に出場した。すなわち、わが国がオリンピックに水泳選手二人を初めて派遣した時の一人である。一九一九年に広田戸七郎、宮川知平が予科に入学した。この二人は中学時代水泳部で活躍していた。かくて、内田の指導下に小樽育ちの高橋北雄も加わって一九二一年桜星会水泳部が発足し、一九二五年全国高専大会において参加二十余校中五位の成績をあげた。一九二三年、予科生潮田辰次、中村勝士らが主唱しサッカー部の創立をみた。一九二五年の『桜星会雑誌』に「ラグビー・フットボール」についての啓蒙記事がある。一九二四年にラグビーのサークルができたが、初代主将藤江永次は同年十二月ニセコでのスキー合宿中事故死した。だが、この男性的スポーツは予科生の共感を得て、一九二五年ラグビー部が創立された。創設に力を尽くしたのは佐々木勲らであった。

氷雪上のスポーツは北大の独占するものであったが、予科生は文武会のスキー部、スケートイング部に所属して活

躍した。スキーに関しては、一九二〇年一月蝦夷富士スキー登山、手稻にて雪中露営。一九二一年、学部に進んだばかりの加納一郎、板橋敬一らが雑誌『山とスキー』を発刊し（一九三〇年一〇〇号で廃刊）雪と山に若者の心をひきつけた。全日本スキー選手権大会での予科生の活躍を拾うと、一九二四年二月に相川正義がクリスチャニア・スラローム一位、緒方直光がジャンプ一位。一九二五年一月に伴素彦がジャンプ二位。一九二六年一月に岡村源太郎が二五キロ競走二位。ジャンプでは一位伴素彦、二位緒方温光などである。岡村は源ちゃんスロープ（現旭山公園）の名に残り、伴は一九二八年（昭和三）冬季オリンピックにジャンプ選手として出場した。スキー部部歌（相川正義作詞、小野鉄之助作曲）は昭和期の予科生にとって懐かしい歌の一つとなる。

桜星会の雑誌は一九二一年三月に『とどろき』という名で創刊号を出し、翌一九二二年十月の第四号からは『桜星会雑誌』となった。創刊号に載った評論「或る夜の興奮」は「我々は人間である前に大日本帝国臣民だったのか」で筆を起し、「第三帝国」の語句など、当時の治安当局の警戒心をかき立てたが、これはむしろ例外で、大正末期全国の高校において盛行した社会科学研究熱の影響は——少なくとも外見上は——見えず、『桜星会雑誌』の傾向は自然主義くずれとも評され、主観的独善の方向をたどったとも称されている。

文芸のほかに、一九二一年恵迪寮生森田繁を中心に音楽グループが誕生し、翌一九二二年一月札幌シンフォニーが結成され、一九二四年十一月に第一回演奏会が催された。この会のメンバーは学生ホールのストロブを囲んで、登山靴で拍子を取りながら深更まで「ダダダダー」とやるため、まともに卒業はできないと言われた。一九二四年六月には文武会管絃楽部も生まれ、二つの団体が競合することとなった。同時に、北大邦楽会が設立された。提唱者高橋北雄は後に邦楽理論、普化尺八の権威となる。

恵迪寮自治の動搖

一九一九年（大正八）に寮誌『恵迪』が誕生（一九四三年、第三九号で廃刊）している。一九二〇年の寮委員長加納一郎は「本寮自治制の過去現在及び将来」という長文を『恵迪』に発表し、寮の現状と将来についての反省と考察を喚起している。本科生の指導がなくなつてから寮の自治にゆるみが生じたのである。食費の滞納分を購買部の利益で埋め合わせて自炊制を維持しているうちに、購買部も売掛金の回収難から運営に苦しみ、一九二四年（大正一三）に自営を放棄し、商店の請負制となつた。自炊制度も一九二七年（昭和二）に崩壊し、請負制に退行した。

一九二四年の寮務部長大山恭次郎の就任の辞に「近年寮が学校からも町からも猛烈に評判が悪い。風紀が乱れていると言われる」とあつて、借金の整理、門限の厳守、欠席者の取締り、ストームの弊害などが指摘されている。門限の厳守とは、具体的には、深夜まで町で飲酒し、蛮声をあげて街頭を横行することの反省であり、ストームについては、酔余、個々人が寮内でグダグダとストームを行うことを戒めるものである。

この時期について『恵迪寮史』は「委員は寮務を省みず」とまで極言批判している。運動部の遠征等によつて他的高校との交流が活発化し、ことさらに弊衣破帽と長髪が予科生の間に増え始めた。旧制高等学校の教育と寮生活は多大の成果をあげたが、放縱な明治書生の延長があり、真の個人主義育成には徹し得なかつた。寮の開舎記念日は四月八日であつたが、一九二一年から四月新学期となつたので、記念日を五月八日に繰り下げ、この年から記念祭を一般市民に開放し、寮内の催しを見せることになつた。以来、公開記念祭は毎年の寮最大の行事となつた。

陸軍現役将校学校配属令

表記の法令が一九二五年（大正一四）に公布され、予科においても現役将校による学校教練が始まる。この法令によれば、配属将校は教練に關し当該校長の指揮監督を受け、とされているが、日中戦争以後、軍部の發言力が増大し傍点部分は空文と化していく。配属将校は学校教育の中

に割り込んできた異質の要素であるが、予科では軍事教練に対する反対運動は起きなかった。ただし、まことに奇態な教練風景となる。まず欠席の常習であり、羽織袴、下駄ばき、草履ばき、腰手拭のかっこうで整列したり、あるいは麦藁帽での参加である。教練が終わると銃を野原に投げ出して帰り、小使が拾い集めるといった桁はずれの連続である。これらは昭和初期まで変わらない。

予科生一般に安逸の風があったらしく、予科生伊藤秀五郎は『桜星会雑誌』に寄稿して、あこがれて入った予科の実状に対して痛憤の文字を連ねている。他方、外庄は一九二五年の治安維持法公布、一九二六年の学生の社会科学研究の禁止と左傾思想取締りの通達として出現し、次の時期の予科生に犠牲を強いることとなる。

一九〇八年（明治四一）以来、長年にわたって独語教師を勤め、予科生に親しく接したハンス・コラーは一九二五年（大正一四）一月二十八日急逝した。アルピニストであったコラーの使っていたルックザックが模倣されて全道に普及した。コラーは予科に着任してスキーの講釈をしたが、実技は北大在任中に学生生徒とスキー行をともにして身につけたのであった。

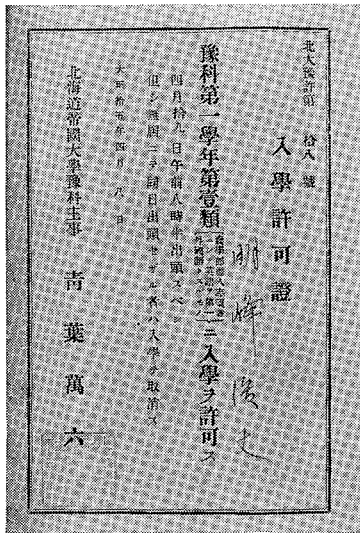
一九二六年五月創基五十年の式典があり、クラーク胸像ができた。寮では記念寮歌「爪つまぐれない 紅あけの黎明の風」（井上哲郎作詞、河口忠雄作曲）を作り、予科の先輩秋野豊太も祝歌に応募し当選した（楡の森蔭」作曲は河口忠雄）。だが歴史を通観すると、この時すでに、札幌農学校建学の精神は一つの転機を迎えていたという感を否めない。

三 強く正しく友よ生きなむ（一九二七年から一九三五年まで）

構 成

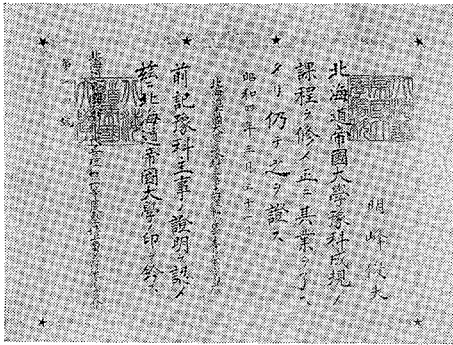
一九二〇年（大正九）四月以来長年予科主事を勤めた青葉萬六は一九三二年（昭和七）二月にその職を退き、以後一九三四年十二月まで三田村孝吉、次いで藤原正が主事となる。二章と三章は事実上青葉萬六主事の時代である。

予科の課程を終えると卒業となっていたが、一九二九年（昭和四）三月から修了と改められた。本学においてはこう改めるのを適正と認める、というだけで改正の真意は不明である。同年、予科規則第一条は「北海道帝国大学予科は同大学学部に入學せんとする者に対して高等普通教育を授け特に国民道德の充実に努むるを以て目的とす」と改ま



1926年の入学許可証

り、一九一九年九月以来の規定に対して傍点の部分が付加された。これは「従来実施し来りし事項を条文に表わせるもの」とされているが、一九一九年施行の高等学校令の語句をそのまま入れたものである。文部省訓令は、学校教練によつて国家的観念を明徴にすることをあげている。国の動向が示すとおりに国家的観念にもある方向づけが加えられ、要求される国民道德の内容も連動していく。一九二七年、大学に書記官一人（専任学生監）が置かれ、翌年には学生課が設けられ



1929年の修了証書

る。学生課は太平洋戦争の終わるまで、学生の動向についてかなり専断的に処置を行う組織であった。

一九三一年十月政府は財政緊縮の政策から、官立大学の予科専門部廃止を意図したが、反対運動によって実施に至らなかった。北大が提出した反対声明書の中から予科についての情報が得られる。すなわち、府県では中学校一七校に対して高校一校が存するが、北海道樺太合わせて二三の中学校に対して北大予科一校があるのみで、しかも五カ年の統計では、予科入学者の四割余が北海道内の中学校出身者である。一九〇七年入学の一〇三人のうち、道内出身は数名にすぎなかったことを思えば、北海道の人口、中学校教育の急速な拡張充実をうかがうことができる。

生徒処分と発禁

例年文武会主催の新入生歓迎会が行われたが、一九二八年(昭和三)五月には、園遊会の席に酒類を出すことになった。新聞は「伝統を破って捌けてきた北大」と大見出しで報道したが、予科の

高杉栄次郎教授が強硬に異議を申し立てたので、会頭佐藤総長はこれを受けて酒を禁止した。文武会委員は総辞職し歓迎会は無期延期となった。以後大学側と学生側委員との間に折衝が重ねられたが、交渉は決裂し、学生側委員は会員学生に経過報告を行った。そして、文武会の学生自治、学生主事への抗議、集會言論の自由等を決議するに至った。これに対して大学は学生の放校停学処分をもって応じた。学生生徒は大学の態度に憤激して十二月六日から同盟休校に入った。そして翌七日には予科生一人の除名、一人の停学という処分が行われた。大学は十日から三日間を休校とし、この間に盟休切り崩しを図った。同じ十日、文部大臣に対し教育に関する御沙汰書が下された。この要旨は、教学に当たる者の精励努力を求めるに尽きるのであるが、盟休中の学生生徒の心理に

も大きな影響を及ぼした。恵迪寮では、寮務部長古河勝夫はかねてから寮生に対し、各自の思想は自由であるが、まどいの場合である寮内に抗争を持ち込まぬように訴え寮の平静化に努めていた。他方、寮委員長前田登は学校側に説得され、一存で寮生の盟休中止を約束してしまったため、委員長の独断に対して非難の声が上がったが、寮生は友情の見地から委員長を許すことになり、寮はまっ先に盟休から離脱した。学内で最後に盟休を中止したのは農学部学生と寮生以外の予科生であった。工学部、農学部教授（会）は、学生の処分に關しては直接訓育の任にある学部の意見を尊重すべきであるという見解を表明しているが、これは正論である。

盟休は終わったが犠牲者の復学と文武会改組の問題はしこりとなって残った。翌一九二九年三月予科生三人につき思想上問題ありとして父兄を呼び出し、ひそかに諭旨退学させた。一九三〇年四月十日、生徒担任制度が設けられた。学科主任や組担任は人事記録に記載されるほど、重視されたものであるが、新たに設けられた生徒担任はそれらとは扱いが異なり、思想善導を目的として、予科教官が数人の生徒を受け持ち、学業、操行、健康について個人的に指導するものであつて、個人担任と通称され太平洋戦争が終わるまで存続した。

一九三二年（昭和七）五月三十日新入生歓迎会の折に、言論の自由、学生の自治等を訴えるビラが散布された。これを機に、かねてから左傾活動を内偵中の特高警察によつて、六四人の学生生徒が治安維持法違反で検挙され、空前の処分となった。この年予科生の処分は二月から十月にかけて、停学では二週間一人、一〇日間二人、七日間一人、三カ月七人、六カ月六人、一年間三人、そして除名二人、諭旨退学二人、譴責二人、訓戒一人、合計二十七人の多きに達した。この時の全学的大量処分について、卒業生をはじめ学内全体に「学生課は学生を導くことを忘れ、狂気じみた取締り」をしているという非難の声が上がった。かつて恵迪寮生時代、浴場で寮歌の音頭をとつて長湯していた尾崎卓郎が、今や学生課長として「思想善導のコンダクターをやつて居られる事は北大としては誠に御同慶に存ずる

次第」という文章も残っているが、尾崎卓郎個人の手柄も、特高警察と結びついた学生課の動きの中に埋没したと見ることになる。

一九三三年（昭和八）「北海道帝国大学学生生徒出版物取締規程」が制定された。『桜星会雑誌』にも発行禁止処分となるものが出た。一九三二年の第二五号『楡影』、一九三四年の第三三号などがそれである。前者では「ヤングチャイナ小論」の中の「打倒帝国主義は新興中国の標語である」云々の文章が、後者では「宇宙の謎」の中での「現代の国家的生活の喜ばしからざる状態」の指摘が問題視されたようである。これら発禁対象となった評論は、客観的に見れば、むしろ当時の予科生の勉強ぶりとして評価できる。桜星会文芸部（一九二八年に雑誌部を改称）は一九三七年に『桜星会文芸部史』を発行したが、編集に当たって寄稿文の扱いに気を配っている形跡が見られる。本心を言えない時代となっていたのである。

学生課が力を尽くすべきことはむしろ厚生の方である。一例をあげれば、一九三一年に全学で一五人の学徒が病死しているうち、予科生は一〇人を占める。結核が何割であるかは不明であるが、結核死亡者がいわば結核適齢期の予科生に集中したことは容易に推察できる。

桜星会部活動と応援団

一九二七年（昭和二）応援団規則が制定され、全予科生を団員とする応援団となり、応援団と桜星会は表裏一体の二重構造のものとなる。また、従来『桜星会雑誌』に掲載されていた「各部部報」は、一九二九年から『桜星会部報』として独立し、応援団が発行することになった。応援団幹部は受験生に対し、各部への入部希望を書かせ、入学者発表後、新入生を駅頭に出迎え、希望の各部に引き渡す。夏期休暇に入ると各部は本州遠征に出発するが、一九二八年から応援団の出張応援が始まった。対小樽高商戦での応援は一段と盛大になり、一九三〇年の応援歌「大鵬めぐる」（須田政美作詞、長谷川誠作曲）は代表的な応援歌として長年歌い継

がれた。一九三三年には宇野親美教授作詞の応援歌があり、戦時体制に入るまで毎年応援歌が作られた。一九三六、三七、三九各年度の応援歌を作った河邨文一郎の名をあげねばならない。一九二五年(大正一四)に作られた優勝歌「桑榆嘯紅に」(木村英男作詞、宗知康作曲)は勝利の時に高唱されたが、敗れてもこれを歌っていた時期がある。次の勝利予告であらうか。後には敗北の時、一九二一年の寮歌「生命の争闘」(青野正男作詞、小峰三千男作曲)を歌って雪辱を期するようになった。対高商戦の花形は野球とラグビーであった。予科生は大挙して終日応援し声をつぶした。小樽に乗り込む時は列車内でストームを演じ、車掌の胆を冷やした。高商側のスマートさに比し、予科の応援は蛮風をもって人目をひいた。統制された行動は兵隊のすることとして冷笑したのである。勝利の夜、町は予科生の放歌乱舞に満たされた。

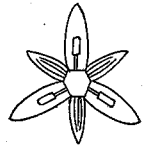
野球部は一九二九年全国高専大会東北予選の準決勝に進出、この時期、各試合に善戦した。野球部南征歌(須田政美作詞、長谷川誠作曲)がこの時生まれた。一九三五年には第一回全国高校大会に出場し、甲南高校、水戸高校を大差で破り、四高に延長戦の末惜敗した。剣道部は一九三〇年に関東・東北・北海道高専大会で決勝に進出した。柔道部は全国高専大会で一九二六、二七、二八、三〇年と決勝戦に進出し、一九三四年(昭和九)ついに全国征覇を遂げ、大正末期に作られた柔道部東征歌(河合九州夫作詞、田代匡之作曲)を心ゆくばかりに歌った。弓道部は一九二九年全国高校大会決勝に進出、一九三五年ついに優勝した。陸上運動部は一九二八年の全国高校大会で長谷川忠男、小室秀一郎らが健闘しフィールドで優勝し(総合二位)、一九三二年にも参加三〇校中総合第二位を得た。

文武会馬術部は一九三〇年(昭和五)四月に設立され予科部員は同年早くも全国高校馬術大会で二位を得た。サッカー部は北日本高専大会において一九三〇、三一、三三年と続けて優勝し、全国高校大会では、一九三三、三五年に準決勝に進出した。ラグビー部初の本州遠征は一九二七年の末で、この時、道内では最強のチームとなっていた。一九

三〇、三一、三四年には全国高専大会の東北・北海道予選を経て、本大会に進出した。そして、大阪花園ラグビー場への出場が毎年の目標であった。一九三四年ラグビー部部歌（坂井稔作詞、飯田毅作曲）が作られた。水泳部は一九二七年の東日本高校大会で二位、一九二八年に第一回全国水上競技大会で三位となり、宮下利三らを擁して全盛を誇った。一九三二年六月恵迪寮プール、翌年六月附属医院の西側と北にプールができ、このうち寮プールと北方プールは水泳部専用となった。恵迪寮プールでの初泳ぎは例年五月一日で水温八度と伝えられる。その成果は次の時期にただちに現れる。競泳のほかに水球の練習も行っていたことを忘れてはならない。大正末期のある夏の日、アイスホッケーのメンバーが円山坂下グラウンドの芝生の上で練習した。これが陸上ホッケー部の始まりである。一九二九年全国高校大会に出場し準決勝に進み、翌一九三〇年に優勝した。一九三五年には箏球部設立を見る。

氷上の競技では、桜星会アイスホッケー部が一九二八年から活躍を始め、一九三三年からはスケート部と改称し、フィギュア、スピード、アイスホッケーの各種目が包括されていたが、一九三一年一月第一回全国高校氷上選手権大会のフィギュア優勝を皮切りに、やがて各種目とも連年優勝するのが当然のこととなった。文武会スキー部に属する予科生は全日本スキー選手権大会、全日本学生スキー選手権大会などで距離競技、ジャンプで活躍した。一九二八年一月、宮下利三は三〇キロ競技で二位。一九二九年の一、二月、宮村六郎は複合競技とジャンプで四位、一九三〇年一月ジャンプで関四郎が三位、複合競技で奥井由雄が一位など、好成績をあげている。

旅行部は札幌近郊の手稲山、三段山、無意根、余市岳などはもちろん、暑寒別山塊、夕張山脈、大雪山などで初登頂を含むパイオニア的登山を敢行した。学部に進み、文武会山岳部を作った伊藤秀五郎らとともに、予科生中野征紀、奥村敬次郎ら山に憑かれた人々が続出する。中野は一九五七年（昭和三十）第一次南極越冬隊に山男兼医師として参加した。奥村は後に予科教授となったが、一九四九年（昭和二十四）八月十一日、札内川九の沢で遭難死した。一九



寮生章

二七年に予科の独語教師アーノルド・グブラーらがヘルベチア・ヒュッテを作った時、予科生も材木を背負って往復した。このヒュッテは一九三四年に故ハンス・コラーの名義で文武会に寄贈された。また、恵迪寮旅行部としては、熟練者向きの山行以外について、寮内に「お誘い」の掲示を出し、寮生へのサービスをした。寮生の登山中に事故があった時は、この旅行部が捜索隊の中心となったことは言うまでもない。

恵迪寮の移転と

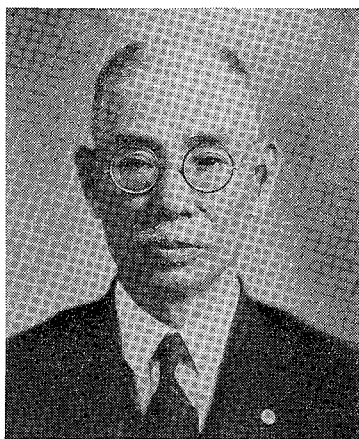
寮自治の再建

一九三一年（昭和六）に北大は法文学部設置要求を出したが認められず、その建設予定地にあった寮の移転だけが認められ、同年五月閉寮となり、同年末、学内北辺に新恵迪寮が完成した。規模は旧寮と同じであるが、各部屋に洗面台がつき、講堂、プールが付設された。また、寮と予科校舎とが遠く離れたので、予科講堂に炊事場を付設して寮生の昼食場とした。この閉寮に当たって名寮歌「別離の歌」（大槻均作詞、中村小弥太作曲）が生まれ、憂愁の調べは送別惜別の歌として歌い継がれた。また、半年間、分散している寮生の団結を保ち、情報を伝えるために『寮報』が発刊され、閉寮後は新聞形式の『恵迪寮寮報』として、寮誌『恵迪』とともに寮内文化の向上に益すること多大であった（『寮報』は予科の消滅にあわせるごとく終刊した）。また一九二九年（昭和四）には延齢草を圖案化した寮生章が制定された。同年から寮史編纂事業を起し、閉寮中も調査を続け、一九三三年十一月に大著『恵迪寮史』が完成した。同年三月には自炊制度が復活し、翌年九月には購買部自営制も復活した。自炊復活に至るまで、寮伝統の献立「手稻の白雪」（マッシュ・ポテト）も大根おろしであったし、漬物だけを菜とする「空気飯」もあって、先輩の残した大負債を返却する苦心がしのばれる。スキーマの普及によって、昭和の初めからスキーマを持って拍子をとる寮内独特のストーム形式が生まれ、破壊的ストームの弊は消失した。

寮自治の再建に関しては、予科生全般の質的向上もうかがわれる。予科の入学競争率は一九一八年（大正七）までは

構成

一九四〇年（昭和一五）一月まで予科主事は藤原正、続いて同月三十日から服部品吉が主事となり、同年五月十六日から予科主事は予科長と改まった。一九三五年（昭和一〇）三月規則改正により、夏期休暇の



青葉萬六

三倍台。以後大正末期までは五倍台であったが、昭和に入ってからは一〇倍を突破することになり、予科生の素質が著しく向上したと回顧されている。

一九三六年（昭和一一）六月二十九日、元予科主事青葉萬六の胸像除幕式が行われた。これは予科卒業者の醸金によるが、寮生も醸出してゐる（石膏像であつたため、大学紛争中に教養部ホール内で破壊された）。

青葉は一九〇三年に札幌農学校に赴任した。予科生は青萬と略称し、その漫談を聞くことを愉しみとした。青葉はこう教えた。理科の人間は公式を駆使して解答を出す、考え方まで公式的になつてはいけな。人間の創造性は公式に偏つた頭脳からは展開されない。眼前の事象に目を奪われて、主体たる人間を見失つてはならない。これが物理の先生の教えである。桜星会の集会の時、一生徒の演説に髭の学生監が烈火のごとく怒り、緊迫の気がみなぎつた。しかし、主事たる青葉は平然として無言である。青葉の無言が事態をそのまま鎮めたのであつた。予科生の敬愛が集まつたのは当然である。

四 我が行く^{かげ}孤影よ霜に凍りぬ（一九三六年から一九四五年敗戦まで）

日数が増して、全国の官立諸高校と同等の休暇日数となった。同じ一九三五年から農類、医類、工類という呼称が公式に行われるようになる。一九三八年四月学科課程中、外国語の履修について別表（課程表D）のように改正があった。従来、第二外国語は随意科目であったが、この改正で英独二カ国語が必修となった。また、この年から農類の第一外国語は独語となった。理学部は一九三〇年に開設されたが、理学部コースの予科は設けられなかった。しかし高校を卒業して理学部に入学を志す者の数が年々減少し、一九三五年には予科理類設置の必要が叫ばれるようになり、一九四一年（昭和十六）から理類八〇人の増募となり、予科は農医工理計四〇〇人の入学定員となった。

一九四〇年四月一日付けで再入学の規程が加えられた。すなわち学籍を失ってから二年以内に再入学を願ひ出た者を、銓衡の上もとの学年以下に入学させる件で、高等学校規程の事項を予科規則に明記したのである。一九四一年五月、外国人留学生受け入れの条項が設けられた。アジア諸国からの入学志願者を特別生として受け入れ、在学中の成績によって正規の予科生とするものである。

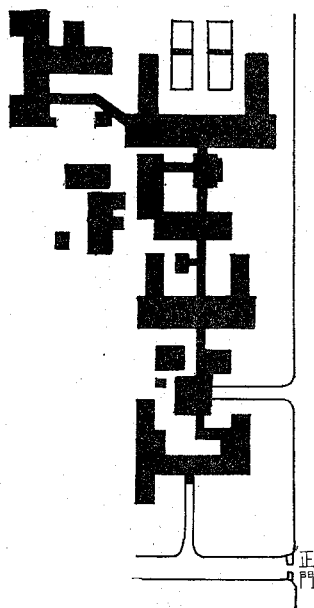
戦局の逼迫にしたがって学制改革があり、予科規則も一九四四年四月一日付けで大改正され、一九四三年四月入学者から予科修業年限は二カ年となった。学科課程も一変し別表（課程表E）のようになった。学科目の整理、名称変更のほか、この時初めて教練が独立した。この課程表は各学科一年間の授業時数を示していて、一週間の授業時間数を算定することは不可能であるが、教練は週におよそ六時間となる。別の資料によると、一九四四年から教練時間数は、一年生については毎週七時間、年間一九六時間、二年生については毎週四時間、年間一一二時間のほかに、軍事学が年間に五〇時間、兵器学が年間に六〇時間とされた。学科課程のほかに修練の一項が加わり、授業は教授と修練を一体とし、生徒の全生活を修練の対象と考え、全寮制をうたっている。しかし、予科生一二〇〇人に對し寮の収容数は二四〇人にすぎない。理類の増加に伴って、寮の一室を五人とし、収容数を三〇〇人にしたばかりである。そこ

で、二年、三年の寮生を減らし、一年生だけでも可能な限り寮生活をさせるようになった。大学正門脇の、一九〇八年（明治四二）に建てられた木造二階建て予科校舎は鉄筋コンクリート造り、三階建てに建て替えとなり、東側工事が一九三四年八月に着工し、一九三五年八月に完成し、西側工事が一九三六年六月に着工し、一九三七年三月に完成した。この予科新館が現在の本部事務局である。

入学試験

予科は発足時から東京試験場を用意し全国から入学希望者を募っていた。この東京受験は一九四三年（昭和一八）の入試まで行われ、以後ついに復活することがなかった。一九三九年（昭和一四）から入試科目に歴史が加わり、一九四三年からは英語が除外された。また、一九四〇年からは官立高校と同期日に入試を行うことに改めた。この措置はかねてから懸案となっていたことであるが、直接的には、一九三九年の予科入試競争率が一七倍という驚異的数値に達したため、他校との掛け持ち受験による無用の混乱を避けるためであった。

太平洋戦争末期、学徒勤労動員は年々比重を増し、一九四四年の中等学校における学業は放棄に等しかった。文部省はこの点に配慮して、一九四五年春の入学者に対して全国共通の入試問題を作成し、一九四五年一月二十四日から



1937年改築後の予科校舎

全国一斉入試を行った。この時、予科は入学定員の約二割増しの四八六人を入学させた。これは戦時下文科を縮小し、理科を拡充する国の方針に添う措置である。この年は上級学校に合格しても所属中等学校の勤労動員が続いている限り、八月まで進学できないことになっていたが、予科の三月五日付け入学許可通知書には「来四月一日午前九時出学出来ヌ者ハ三月二十五

昭和十四年六月七日

主 事

第三學年學級主任

頭髪未整理者ニ関スル件

近來第二、第三學年生徒中頭髪未整理者不
相成候様被見度候ニ付此際整理セシムル様
厳重御注意相成度候段及御依頼候也

頭髪についての文書
(1939年)

日迄ニ其ノ理由ヲ申出ツベシ」云々と記して
あつて、手回しよく新入生を札幌に招致し、
五月初めには全員の入学を終えた。

断髪令と勤勞作業

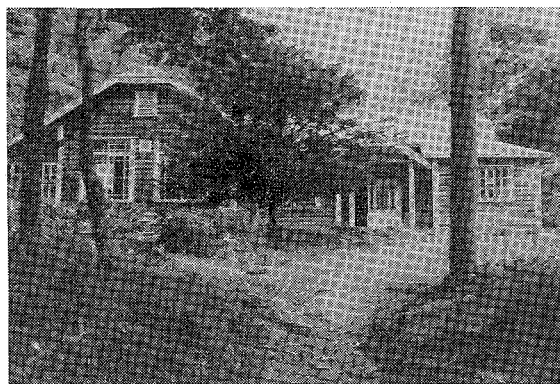
一九三六年(昭和一一)

二月二十六日、東京で

二・二六事件が起きた。報道管制のため憶測

が乱れ飛び、寮では激昂する者が多く、委員は極力自重を促した。二月二十九日、三年農類の教練の時、藤田少佐は遺憾の意を表することなく、いたずらに大言壮語したため予科生に難詰されて退散するという一幕があった。続いて同年十月北海道において陸軍特別大演習が実施され、天皇を迎え、農学部が大本営、行在所となった。このため警戒は嚴重をきわめ、かねてからマークされていた学生生徒には官憲の尾行がついた。また、十月六日、札幌飛行場での觀兵式の後、こともあろうに恵迪寮の前の芝生に仮屋を設け、賜饌があつたので、寮生一同は禁足となった。

この行幸を機に、予科生の長髪が問題化した。すでに前年の春に学校側は「予科生の自覚による自発的断髪」を期待したが、その期待も空しく、一九三六年の行幸の時によりやく予科生の頭は五分刈りになった。だが早くも翌一九三七年春には長髪乱髪が目だつようになり、これを禁ずる学校側に抗議した予科生二人が休学となった。これは学校側が父兄と話した結果であつて、事実上の停学処分であつた。なお、一九三八年五月北大の学生生徒が治安維持法違反で検挙され、起訴猶予、除名処分となったが、そのうち予科生は四人で、一九三六年末の断髪令に対して反抗運動を行っていた者も含まれていた。長髪の根絶は困難であつたらしく、一九三九年に出された断髪令についての文書が残っている。同年の八月に文部省は「生活の刷新戦時体制化」として、学生の丸刈りを実施させた。長髪には何の意義



支 笏 寮

もないことは自明であるが、一つの風俗であって、藤原正主事の髭もむさくろしいと感じられるのである。髪を伸ばすな。伸ばしているのではなく、自然に伸びるのです。この応答は哲学者藤原正の詭弁を学んだ結果である。彼は予科生に対して、立小便を巡査にとがめられたら、小便が漏れただけだと言えと教えたのである。

一九三八年六月に集団的勤労運動実施の省令が出た。ヒトラー・ユーゲントの真似にすぎないし、作業も数日間のことであるが、全学的に綿密な計画を立て、計画書ばかりがおおげさで太平洋戦争末期の勤労動員に比すれば遊びである。予科は七月十日からの三日と九月七日からの三日、つまり夏期休暇の前後を六日間けずって作業を行った。狭

窄射撃場と蹴球場の造成、月寒の歩兵第二五連隊宮庭の草刈り、寮の非常用溜池（新寮の北側）掘りはともかく、寮の大掃除も作業の一つであったのは笑止である。一九三九年七月、学内排水溝掘りが行われた。

桜星会三十周年と 桜星報国団結成

桜星会は一九四〇年に三十周年となるので、一九三八年の桜星会委員は記念事業について考えた。そして、記念事業の基金募集活動によって予科同窓会をも結成しようとした。同年のうちに支笏湖畔に校外寮を建設しようとしたが、時節柄、はでな募金活動は許されず、ために予科同窓会はついに目の見なかった。他方、同年春、工類二年の広瀬貞が死去し、父君広瀬勝から一〇〇〇円の寄付があったので、千歳村役場の出張事務所を買収、修理し、桜星会支笏寮として一九三九年九月二十五日に開寮した。最大五〇人を収容できる規模で、以後、週末や休暇には予科生が続々と清遊に赴

く。大戦末期には「修鍊道場」という大層な看板を掲げていた。

一九四〇年、国を挙げての「新体制」運動に歩調を合わせ、文部省は授業、寮生活、校友会活動を一体とした修鍊組織を作るように指示した。同年十月桜星会は三十周年記念式典を挙行し、岩崎五郎作詞の記念歌「清き郷石狩の」は作曲家呉泰次郎によって作曲された。しかし、これが桜星会の終わりであって、翌一九四一年二月には文武会も解体し、全学の報国会が結成された時、予科はその分会、桜星報国団となり、従来の桜星会各部も報国会「全学会」内の班となった。応援団も一九四〇年末に解散した。

翌年の報国会「全学会」中の班は柔道、剣道、角道、弓道、陸上競技、ア式蹴球、ラグビー蹴球、水泳、野球、庭球、山岳、スキー、スケート競技、(陸上) ホッケー、箒球、ボブスレー、旅行、航空、射撃、騎道、自動車、文芸、講演、邦楽、洋楽、美術、写真、大東亜研究、宗教、日本精神文化研究、北方文化研究の諸班であり(一九四二年陸上ホッケーは杖球と改称された)、予科には各班の分会が存した。やがて、野球、庭球等敵性スポーツとして廃止されるものも出てくる。

繰り上げ修了と勤労動員

戦局の逼迫に伴い予科修了年限の半年短縮が始まる。一九三九年(昭和十四)入学者は規則どおりに三年後の一九四二年三月に修了したが、一九四〇、四一、四二年入学者は、それぞれ一九四二年九月、一九四三年九月、一九四四年九月に、繰り上げ修了となった。そして、一九四三年入学者は一年短縮の二年制を適用され一九四五年三月に修了した。また、一九四一年十月には、徴兵延長期短縮のため予科生一五人が修学中途で徴兵されるに至った。

勤労動員について若干を摘記する。一九四二年夏札幌飛行場の滑走路造成作業に通った。小樽高商の生徒はまじめなので衛兵勤務に就いていた。隊列を組んだ予科生が門を出入りする際、形どおりに「歩調とれ、頭右かしら」と組代表が

号令をかけるが、予科生はそっぽを向いて通り過ぎる。時ならぬ対高商戦であった。一九四三年八月前半の半月間、樺太^{かみしすか}上敷香^{けとん}北方の気屯^{けとん}の陸軍飛行場工事に出勤中、二年農類三組大西誠一は不寝番勤務の後に就寝したが、深夜、心不全様の症状にて急死した。一時間半にわたる人工呼吸も効なく、翌朝、報国隊長箕輪代次大佐から予科生に対し急逝が知らされた。以後、現地での入棺、火葬、通夜などの経過が『桜星』第三号に筆を抑えて記述されている。暗雲降雨にさまたげられ、数日延期された慰霊祭は、予科生全員による「都ぞ弥生」の合唱をもって始められた。親友の捧持する遺骨は札幌駅頭において個人担任西村稔に迎えられ、本学初の報国会葬が行われた。故大西誠一はすでに父を亡い、母堂大西たかが期待をかけた唯一の男子であったが、報国会葬の後、母堂より今総長あてに一万円が寄せられ、これは予科生の育成金とされた。また故人の所属した騎道班へ一〇〇〇円の寄付があった。

一九四三年秋には援農作業にも出勤している。食糧不足の折から援農作業は一面では鋭気を養うチャンスであった、一人一日七、八合の米を食い、合宿では連夜の寮歌祭、ストームで村の世話役を驚かせた。一九四四年は土地改良事業などのほか、帯広市郊外（旧音更^{おとよ}村）の陸軍飛行場の掩体（飛行機を秘匿格納する施設）工事に従事した。当時北部軍（大本営直轄の第五方面軍）経理部主計少尉和田英夫は学徒出身の将校で、予科生の指揮監督に当たり、巧妙に作業計画を立て予科生を緩急自在に指導し、夜は予科生と人生、哲学について語り合い、十勝川のほとりでファイア・ストームをやらせた。日ごろストームを禁止され、まして夜間火をたくことは許されなかった予科生にとっては痛快なことであった。中尉で復員した和田英夫は予科で法制を教えることになる。

一九四四年冬期休暇の帰省は差し止めとなり、十二月末から一九四五年三月まで、二年生は群馬県太田の中島飛行機組立工場に派遣され、空襲に遭遇した。甚大な被害があったにもかかわらず、間一髪之差で予科生は難を免かれた。一九四四年のある日、予科生の一団が校内で野球に興じていたところ、通りかかった軍人たちが立ち止まって、

いつまでも見物して動かない。不審に思った予科生が「一緒にやりませんか」と声をかけると、軍人たちは目を輝かせ、「やらせてくれるか」と応じた。結果は予科生にとって惨たるものとなった。軍人チームの投球は豪速球、カーブ、打っては長打。実は皆学徒出身の飛行将校で、大学時代の名選手たちであった。このころ予科の先輩たちも広大な戦域の各所で苦戦していたのであった。

一九四五年春の新入生は二週間独語の変化を教えられただけで、五月下旬には二年生とともにいっせいに援農作業に出発し、寮には三〇人ほどの防空要員が残るだけであった。残寮組の一人寺山有吉は七月十一日滑空訓練中、突風にあおられ墜落し、脳挫傷で翌日死去した。寮友は「別離の歌」を歌って別れを告げた。七月十五日、室蘭の鉄工場は艦砲射撃を受けたが、ここで作業に従事していた予科生に被害はなかった。

敗戦前後
一九二一年（大正一〇）以来予科の英語教師であったハロルド・M・レーンはスパイ容疑者とされた。

結局、一九四二年（昭和一七）七月、交換船で帰国する。札幌駅フォームでは、予科生がストームを演じて先生の帰国を惜しんだ（一九五一年四月再び着任）。金属回収令によってクラーク胸像も献納され台座のみが残ったが、一九四三年六月二十五日献納式のあと中央講堂に安置されたものが、一時行方不明になるという椿事が起こった。予科生数人が夜運び出したが、隠しきれずに元の台座上にもどしておいたのであった。そうとは知らず出校してきた者たちは、元のままの胸像を見て、よくできた代用品かと思ったのであった。同じ六月、札幌市内に発疹チフスが発生し、寮生はにわかに清潔心を起こし、いっせいに洗濯をし、全寮あげての蒲団干しとなったが、恐らく寮として空前絶後の景観であったと思われる。

一九四三年九月末鈴木限三教授が突然退官した（辞令面では一九四三年十二月二十日付）。宮部金吾の招きで予科教授となり、「神様のような人」として尊敬された。几帳面に勉強する者にも、欠席常習者にも、思いぞ屈して退学して行

く者にも、等しく親愛の情で接した。はめをはずした生徒たちになり代わって、一周りも年下の学生主事に「どうぞお赦し下さい」と繰り返し頭を下げた。出欠をとる時も、出席簿を見つめたまま。出席者数人が組全員の代返をしても何も言わない。数人の出席者は欠席者に代わって「どうも有難うございます」と謝する。独語のテキストで生物学を講じ、書卷の気を教えられた。退職に当たって、「みなさんが私を信頼してくれたから、私もみなさんを信頼した」と語るに及んで、腕白予科生の間にすすり泣きが起こった。

一九四五年八月十五日、終戦の詔勅が下り、長い戦争は終わった。動員先から一年生がまず帰校し、九月末から授業を開始し、二年生の授業は十一月中旬から始まった。帰校する二年生を駅頭に出迎えた教授は、五月出発の時とは打って変わった長髪、高下駄、腰手拭の風俗に一驚したが、生徒の側も軍服まがいの国民服であった教授たちが背広とネクタイに豹変しているのを奇異の目で見た。

一九四五年十月、陸海軍学校から復員した者の入試が行われ、一三三人が一年に入学した。この年は、ほかにも、文部省銓衡の外地からの入学者、台北及び京城両帝予科よりの転入、計一六人があり、一九四五年度の一年入学者は六三五人に及んでいる。ちなみに、一九四五年十二月二十四日現在の在學生は一年六二四人、二年三九九人、計一〇二三人である。

一九四五年十一月、服部品吉が退き、宇野親美が予科長となった。

恵迪寮生活の制約

恵迪寮は新しい寮に移ってから着々と自治の実績をあげた。寮内には運動部各部が割拠し、ともすれば寮自治への参加に背反する事例も生じ、一九三五年ごろから部屋割問題について真剣な議論が行われた。一九三七年五月、第三十回記念祭が盛大に催され、記念祭歌「春未だ浅き」(平城鷹雄作詞、安戸昌夫作曲)が特に作られた。しかし、この記念祭が終わって一月余りの後に日中戦争がばっ発し、以後、寮の伝統に

対してさまざまな制約が加えられる。一九三七年秋は恒例の定山溪旅行を中止し、陸海軍に献金している。一九三八年は高校長会議の決議に基づく学校側の意向によって、記念祭は学内関係者や先輩を招くだけの地味なものとなった。以後記念祭は非公開となり、燈火管制のため、聖火祭を明るいうちに行うこととし、一九四二年からは大提灯ちようちん一つを囲むだけとなった。一九三九年秋の定山溪旅行では、学校側の反対を押して伝統の芝居（恵迪座）を、傷病兵慰問の名目で行った。傷病兵は喜んでくれたが、学生主事は苦りきって退席し、後日委員は最高二週間の停学処分を受けた。一九四〇年（昭和二五）の秋からは支笏湖旅行となり、一九四二年まで実施された。そして、名寮歌「湖に星の散るなり」（切替辰哉作詞、岡田和雄作曲）が生まれた。

一九四〇年から火曜講座、金曜講座が始まり、学内の諸教官を招いて学問や札幌農学校建学の精神について学ぶことにした。一九四〇年九月、全国学生主事会議が北大で開催されたが、これに先だって急に壁の塗り替えが行われ、名物の落書が一掃された。寮生の選挙による委員会は、一九四〇年の末から予科長任命の幹事会となる。紋付着用、街頭デモ、ストームが禁止され、煙草を吸う者は寮を出され、特別の時を除いて禁酒となる。なお、一九四〇年から新入生歓迎会を鈍才会と称し、一九四一年二月から、予科を修了し退寮する者を送る会を凡才会と称した。一九四〇年九月、米の配給量が減り、パンの代用食が出る。一九四二年、桑園北方に予科農場一町五反を得、また豚を飼い畠を作る畜産園芸係を置き、食糧の自給に努めた。

一九四〇年六月から学生主事を兼任した宇野親美は絶えず来寮し、寮生と接触した。禁を破ってストームが起ると、その渦の中に入ってもみくちゃにされながら「やめろ、やめろ」と叫び続けたが、処分はなかった。かつて無言のまま立ち去って、後からしらしらしく処分を言い渡した学生主事とは人間のできが違っていたのである。



宇野親美

戦時下の部活動

剣道部は一九三七年(昭和一二)関東・東北・北海道高専大会で優勝した。柔道部は一九三七年高専全国大会の決勝に進出したばかりでなく、一九三六年から四〇年まで大活躍を続けた。陸上運

動部は全国高校大会で、一九三八年四位、三九年六位、四〇年鈴木恭二、秋間哲夫らの活躍で三位と毎年好成績をあげた。サッカー部は一九四一年七月北日本高専大会で優勝したが、非常時下、大きい行事は認めぬという文部省の方針によって練習試合とされ、優勝旗を手にすることができなかった。これを幻の優勝という。野球部は一九三七年の全国高校大会では三回戦まで健闘した。庭球部は一九四二年全国高校体育大会で四回戦に進出。水泳部は一九三六年の全国高校水上競技大会の東部予選で二位、全国決勝で五位。この年、川上理郎は百メートル、二百メートル自由型の高校記録を樹て、意気は上がり、創部十五周年を記念して水泳部部歌(築城武義作詞、柳沢三郎作曲)が作られた。

一九三七年以後も上位成績を保ち、一九三九、四〇の両年関東・東北・北海道高専大会で優勝した。陸上ホッケー部は全国高校大会で、一九三六年度準決勝、一九三七年度決勝、三九年度準決勝に進出し、一九四二年度に優勝した。文芸部は予科勢は一九三六年全国高校大会で三位、一九三九年に優勝し、翌一九四〇年二月桜星会馬術部が創立され、同年大学高専選手対抗障害で団体二位、個人一位を得、一九四二年全国高校大会で二位を得た。スキー部員は全日本学生スキー選手権大会の距離競技において、特に一九三七年、一九四一年に健闘している。氷上の競技においては、全国高校氷上選手権大会のスビード競技で一九三七年から一九四一年まで連続優勝し、一九四三年一月、全日本学徒氷上錬成大会高専の部で優勝した。アイスホッケーは一九四一年高校決勝、高専決勝とともに優勝した。伝統的行

事であった対小樽高商戦は一九四二年を最後に中止された。

スポーツに熱中すれば学業の方は遅れがちになる。昔から夏期休暇と冬期休暇の間に、学校から父兄あてに親切にも、いわゆる「暑中見舞」と「年賀状」が送られる。「第〇学年〇類〇組誰某殿第〇学期成績左記ノ通りニ候間御家庭ニ於テモ可然御注意有之度此段得貴意候也」で始まり、成績不良学課、出欠日数が報知される。教練は体操という学科名になっていたから、数学や物理の不成績は納得できるが、運動部で活動している息子が何故体操まで落第点なのかと、親が不思議がるのも無理はない。

桜星会文芸部は一九三七年三月、『桜星会文芸部史』を出し、一九四〇年七月『桜星会雑誌』第五〇号で三十周年を記念しているが、一九四一年一月発行の第五一号には、新体制下、一九四一年には報国会が誕生するであろうという記事が見られる。一九四二年二月『桜星』第一号が刊行された。

遠友夜学校は一九四三年に開校五十年記念を迎えたものの、一九四四年四月各種学校校舎転用措置に関する命令によつて校舎を失い閉校した。多くの予科生がこの教壇に立ったが、どん底の生活に触れ、人生について学ぶことがいかに大きかったかは想像に難くない。特にこの学校に情熱を傾け、終焉を看取った予科の先輩高倉新一郎の名を代表として挙げておく。

五 魂^{たま}ゆする生命^{いのち}の饗宴^{うたげ}（敗戦から予科の消滅まで）

窮迫変則の学年暦

一九四五年（昭和二〇）八月二十一日に戦時教育令は廃止され、九月十五日には教育の平時体制への復帰方針が出た。だが一九四五年の北海道は冷害のため食糧難となり、暖房用石炭の欠乏と相まって、十二月十七日から翌一九四六年三月末までの長期休暇となったため、一九四五年年度の授業は二ヵ月程度にすぎない。一九四六年、勅令によって修業年限は三年制に復し、一九四四年入学者は三年生になったので、一九四六年春の修了者はいない。入学定員も四〇〇人に復した。当然予科規則も改正され、修業年限三年の項のほか、別表のような学科課程の改正（課程表F）認可を文部省に求めた。ところが、その上申書は本省において紛失し、ついに認可されず、一九四八年大学教育課はこれの一九四六年四月一日付け施行を認可したという扱いにした。敗戦後の中央官庁の混乱ぶりをうかがうことができる。ただし後述のごとく変則的授業を余儀なくされたので、この学科課程表どおりの授業が行われたわけではない。

一九四六年一月から一カ年間、予科新館は占領米軍に接収された。一九四六年三月から補習授業が行われたが、寮は閉寮中で寮生は欠席した。同年の入試は四月五日から札幌、旭川、函館で第一次試験を行い、六七三人を合格とし、四月三十日と五月一日に第二次試験を札幌で行ったが、三九六人の合格発表は七月十一日まで延期された。これは「軍関係学校出身者は在籍生徒の一割以内とする」制限が存在したため、軍の学校に在学一年未満の者を制限外とする了解を得るまで合格発表を待ったからである。寮の幹事会は委員会制に復した。寮生は四月十五日までに帰寮

第二次受験番号

類別	番号	1029
----	----	------

第一次銓衡合格通知書

第一次試験ニ合格セルヲ以テ來ル四月三十日（）午前九時ヨリ第二次銓衡ヲ行フニ依リ當日午前八時三十分迄ニ出頭スヘシ 出頭ノ際本書持参スヘシ

第二次銓衡場所 札幌（本學）

旅行順序其他詳細ハ四月二十九日試験場ニ掲ス
昭和二十一年四月十五日

札幌市北八條西五丁目

北海道帝國大學豫科

合格豫定通知書

當科（文部省）類第一學年ニ入學ヲ許可ノ豫定

一、諸君折返シテ電信ニテ返信（第二次受験者試見此項）スベシ

七月廿二日返信ナキトキハ入學許可ヲ取消ス
一、來七月廿九日（月）午前九時出頭スベシ、當日無届ニテ出頭セザル時ハ入學許可ヲ取消ス

一、近距離ノ者ハ成可ク父兄同伴ニテ出頭セラルベシ

一、出頭ノ際ハ寫眞（最近半年間撮影モノ）一枚、戸籍抄本、出身學校ノ修業（文部省）證明書、認印等ヲ持参スベシ

昭和二十一年七月一日

札幌市北七條西五丁目

北海道帝國大學

寄宿舎ハ入寮ノ本
裕無シ豫メ通シス



第1次合格通知書と合格予定通知書（1946年）

し、二、三年生の授業は四月二十二日から始まったが、食糧の配給が長期間途絶したため、五月末にはまたも閉寮となり、寮生欠席のまま授業が行われた。一年生の授業は八月一日から始まり、同月下旬一週間ほどの休暇があった。八月末日、新入生が入寮し、九月二日から三学年そろって第二学期の授業に入った。すなわち、閉寮中、委員が手段を尽くして食糧を蓄積したからである。一九四六年十二月の初めから翌一九四七年三月末まで、再び長い冬休みを余儀なくされた。以上のように一九四六年度の授業維持も困難をきわめた。

一九四七年四月の新入生四一六人の中に、初めて女子三人が含まれていた。教育基本法に男女共学がうたわれているからである。また、この年から従来の類別を廃し、理科四〇〇人の定員で募集し、入学後、志望学部ごとに類別した。さらに長らく中断していた東京試験場復活の準備をしたが、短期間に知能、体格、面接の試験をし、合格判定をすることは困難であるため、実施できず、予科の終わりまで東京受験は復活しなかった。ちな

変則期の授業時間表 (1947年1学期, 2年工類3組) の復元

土	金	木	水	火	月	曜日	時限
英語第二	数学第一 井上	数学第二	独乙語第一 吉崎	物理	数学第一		1
高野	物理	奥村	数学第二	小林	井上		2
数学第二	学 小林	物理学 小林	井上	独乙語第一	英語第一		3
奥村	英語第一 本堂	独乙語第三 ヘッカー	独乙語第二 大野	吉崎	本堂		4
体	独乙語	隔週 西木沢村	哲学・論理 隔週 富永	英語第二	無機化学		5
育 有岡	第二 大野	数学第三	数学第二 奥村	高野	坂元		6
	隔週 明峯橋本	秋山	図	有機化学 若山	英語第三 清水		7
	無機化学 坂元		学 中根		独・仏・露語 選択		8

みに、この年の入学者は北海道帝国大学予科最後の入学者であるとともに、予科最後の修了者でもある。右のほか、一九四六年から一九四八年にかけて外地引揚学徒を、数回にわたって試験の上受け入れ、合計九五人を各学年に編入せしめた。一九四七年四月からはおおむね学年暦に添った授業に復した。同年四月に法文学部が発足し、九月一日に開講式を挙げた。予科校舎は新館から順次法文学部に明け渡され、予科の教室は工学部、医学専門部、臨時教員養成所等に分散していく。定員を超える生徒と教室難に困窮することになったのである。

一九四八年にも予科生約四〇〇人が入学している。この年の入学者は一年間予科の白線帽をかぶったが、翌一九四九年、無試験で新制大学一年生に組み込まれ、新制大学第一期生として卒業する。

宇野親美は予科長となると同時に、坂元義男教授を主任とする、数人の生徒係教授を置いた。宇野予科長は予科生中の法文学部進学希望者のために、予科内部限りの措置として文類を特設した。また下宿難を救うため帝国製麻会社などから組立式二段ベッドとマットを譲り受け、恵迪寮の収容数を三五〇人に増し、予科教室の一部を校内寮とした。教官に対しては、出退勤を示す名札を廃し、授業進度表という煩瑣なものの作製をも廃した。後者については、彼はかつてその不用を唱えて辞表の提出を求められたのであった。一九四七年五月十日には教官と父兄の会（PTA）を発足させ、集まった資金を厚生育英に役立てた。

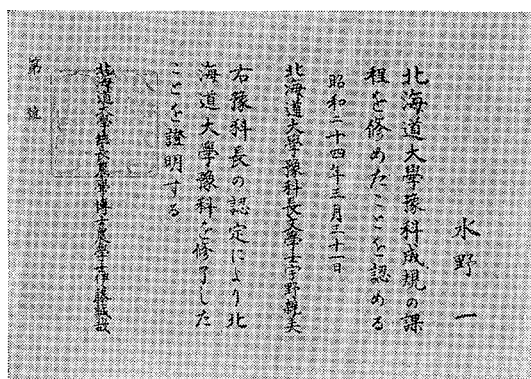
予科
生徒係明峯俊夫は恵迪寮生と密接に交わり、寮に泊り込むこともしばしばであった。戦後、寮の運営は昭和初期の完全自治に復したが、寮規定も一九四八年四月一日付けで自治の実状に則して改められ、入寮選考を寮生が行うことが明示された。

一九四九年新制北海道大学の発足に伴い、旧制予科は消滅に至るまで新制の北大内に包括され、伊藤誠哉学長が八月から予科長を兼任し、明峯俊夫が予科主任となった。

予科生の動き

恵迪寮では一九四六年（昭和二一）十月二十六、二十七の両日、復活第一回の公開記念祭を盛大に行い、市民の群れは廊下にあふれた。窮乏の時代ではあったが、記念祭に注ぐ寮生の熱意は高揚し、一九四八年まで公開記念祭が行われた。

桜星会是一九四六年九月十三日に再出発の発会式を挙げ、同時に応援団の結成式も行われた。同年九月末からインターハイの仙台遠征が行われ、十月十七、十八両日には小樽高商との定期戦が復活した。一九四七年十一月十八日、



1949年修了証書

選挙によって石川武が桜星会委員長となり、この時から石川の提示した新規約の下で、桜星会は従来の学友会的性格を脱して、生徒だけで組織する自治会的な会となった。そして、当時の困難な勉学状況を直視し、学業維持のための生活確保を活動の焦点とし、特に恵迪寮委員会との連係を密にした。ところが、これでは運動部、応援団の活動は制限される。石川委員長と応援団長板谷実の間で折衝があったが、結局、応援団は父兄から寄付金を募り遠征の費用とした。

一九四八年六月公立学校授業料値上げをめぐる全国の高専に反対運動が起きた。予科では六月二十三日に生徒大会を開き、板谷実を議長として約九〇〇人の予科生が参集し、同盟休校の可否について激論が交され、採決の結果、盟休を可とする者がわずかに半数を超えた。石川委員長が責任を負って、二十五、二十六の両日、盟休は平穩のうちに終わった。この時の全国的学生運動を機に九月に「全学連」が結成されたが、桜星会は全学連の運動方針にしたがわなかった。

ラグビー部は一九四六年全国高校大会の準決勝に進出したが、食糧難をおして部活動を維持することは至難であった。病魔に冒される部員が続出し、訃報に接し葬儀に列席し、しかも黙々として練習に出たのである。一九四七年一月全日本大学スキー選手権大会の大回転競技に出場した予科生比良吉利は強剛に伍して六位の成績をあげた。庭球部（硬式）は一九四七年全国高校大会地区予選を勝ち抜き、本大会で準決勝に進んだ。陸上競技では一九四七年、佐藤幸雄、森谷功、黒沢汪^{わう}らの活躍によって全国高校大

会で優勝した。排球部は一九四七年全国高校大会の本大会で二勝二敗の成績を得た。水泳部は一九四七年の全国高校大会で鳥居昌男が百メートル、二百メートルの自由型記録を立て、一九三六年に先輩の出した記録を更新した。サッカー部は一九四八年七月全国高校大会東北・北海道大会で優勝し、全国大会出場権を得たが、諸事窮迫のため出場を断念した。スケート部は一九四九年一月の全国高校大会のアイスホッケーで優勝した。陸上ホッケー部も一九四七、四八の両年全国大会に出場したが、一九四八年七月のある日、宇野予科長と一部員との対話が伝えられている。インターハイと期末試験が重なるがどちらを放棄するか。試験を捨てます。よし、それなら行ってこい。このようなエピソードにも、当時の変則的状況に対処する予科長の態度と再建運動部の熱意がうかがえる。北大にボート部が生まれたのは一九四五年秋であった。一九四七年には予科クルーができ、学部学生小峰仙一を監督として、七月瀬田川での全国高校大会のフィックスの部に出場し、準決勝に進んだ。なお、一九四九年にはボート部員が恵迪寮委員会に移動したような状態となり、寮の運営に尽力した。この年第一回学内レガッタが行われた。一九四六年恵迪寮生の間に空手部創設の動きがあり、一九四七年鈴木幸種^{ゆきむね}を初代主将とし、同年九月予科空拳部として認められた（後、空手部と改称したが、一九五〇年六月、イールズ事件の後、暴力的運動部という濡衣を着せられて解散させられた。一九四九年秋をもって伝統の予科対小樽高商の定期戦も終わりを告げ、この定期戦の後、応援団も寮の一室で解散の集いを行った。

寮の食事は、朝は目玉の映る雑炊、昼は正体不明のパン、夜ようやく一杯の米飯であった。その窮乏の中で、予科生は時あるごとに肩を組んで「がんばって行こう」と叫び励まし合った。夕刻、寮の浴場では寮歌の合唱が昔ながらに起こり、夕食後、深夜まで全寮は深閑となり、遅れた学力を取りもどすために勉強にいそしんだ。

予科伝統の友情と団結の集いの中に、若き哲学教授古田惇二^{あつじ}もいた。彼は予科在職中、ずっと寮に住み、文字どおり一寮生として、寮生と語り合った異色の教授であって、予科終焉に当たり寮生に見送られて札幌を去った。一九四

九年十月二十二日予科最後の運動会が開催された。そして、一九四八年に予科に入学して翌年新制大学に移った人々が、一九五〇年二月十八日、予科最後の修了となる寮生のために送別晩餐会を催した。この、心ならずも白線帽を脱いだ人々が、寮の自治を正しく伝えようとした努力を多ししなければならぬ。伝え残された恵迪寮の美風の一つとして、食堂でのマナーがある。四人で一つの食卓につき、先着者が給仕する。乏しい食事でありながら、分配するにも自分の取り分を削ってまで意地を通したのであった。

予科の終末を控えて、一九四九年六月、予科閉校記念誌『楡影の下に』が発行された。なお、旧制予科の寮生によって作られた最後の寮歌は、一九四九年の寮歌「彷徨^{さまよ}へる心のままに」である。

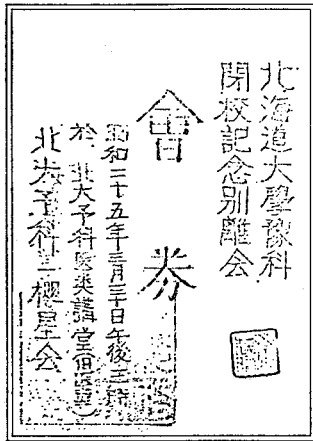
結 告ぐるなりいたき別れを（予科の終末）

一九五〇年（昭和二五）三月三十一日をもって旧制北大予科は消滅した。その前日、三十日に理類三八〇人、文類六一人、計四四一人の予科最終修了式（予科終校式）が中央講堂で行われ、伊藤誠哉学長の式辞を予科主任明峯俊夫が代読した。その一部を掲げる。

明治四十年、一九〇七年六月、札幌農学校は大学の班に入りましたので、予修科を大学予科として三年、本科は三年となり、茲に始めて予科は旧制高等学校と全く同格となったのでありますが故に、今日の予科は此日を以て真に成立したといふべく、それでありましたれば四十三年を経過した事となります。この間に出来ました多数の修了生は其性格上、当然本学学部に進入したのであります、今日本学が愈々益々発展し、北方に於ける厳然たる学府として認めらるに至った事は全く予科に負う

ところ誠に大なるものであるであります。その間に於ける歴代の主宰者を始めとし多数の教職員各位が真に献身的な誠心誠意を以て尽瘁せられました事に對し茲に衷心より感謝せざるを得ないのであります。戦後学制の大改革が断行され、大学は昔の札幌農学校の如く四年制となり、遂に予科は茲に全く廃止の運命に到達しました。教育機関に於てかかる急激な変化の起ることは何人も想像しなかつた事であり、従つて旧制高等学校廃止にあつては、極めて激しい論議が行われました事は、今猶吾等の記憶に新たなるものであります。殊に吾が予科は夙に質実剛健を以て世に鳴り、學術的にも思想的にも、將た又運動界に於ても毅然たる存在であつたのであるが故に更に／＼その感を深くするものであります。今や予科は失われると雖、その精神は実に不死である事を、嘗つて私の最も敬愛する元予科長宇野先生が論された事があつた。誠に然りであつて、そこに新しき生命は再び吾が大学に蘇ることを疑わないのであります。

終校式の後、同じ三十日の午後三時から予科医類講堂（旧医専）において桜星会（委員長芳賀綴）主催の予科閉校記念別離会が開催された。旧教職員、卒業生も多数参会し、会場はなんと名状しがたい別離の宴となつた。翌日の新聞（北海タイムス）の記事には、別離会の「余波が三々五々エルムの森から街頭に進出、遂に狸小路は四丁目のどまん中で名物ストームにおよんだ」とある。



別離会の会券

最後まで予科の教官であつたのは、明峯俊夫、古田惇二、蝦名賢造、樟本成美、齋藤護国、中川時代、丹治敏衛、吉崎十七、中島篤、井上弘、山元周行、小林種樹、金木藤雄、中根孝治の十四人である。四三年間にわたる予科の卒業、修了者は九六六六人である。かつて予科生たりし者は一万七〇〇人に達する（一九四八年入学者を除く）。卒業及び修了者と在籍者との差一〇三四人は退学、死亡等の事由による惜しむべき欠落である。また、予科を終えた者のすべてが北大の学部

に進んだのではなく、他大学に進学した者も少なからずいる。さらに予科から学部へ進む際、予科の類別とは無関係に希望学部を変えることも、かなり自由に認められていた。したがって予科同窓の消息を探るには多大の困難が伴う。

明峯俊夫は予科残務整理主任となり、事務所を（旧）本部建物の一室に置いた。支笏寮は一九五一年一月十日付けで桜星会から北大本部会計課へ移管された。

新制大学発足を目前にして、教養学科担当教官の資格に關し「厳選方針」を主張する進歩派の理想論なるものが容れられ、予科教官の資格審査が行われた。予科教官の大方は帝国大学を優秀な成績で卒業した人々であつたから、改めて審査するとは心情をさかなでする愚挙であつた。このために他大学に流出し去つた多くの優れた先生、氣骨ある先生が数えられる。北大にとつて重大な損失と言わざるを得ない。齋藤護国教授は他の高校を謝絶して予科に赴任したのであつたが、かつて次のようなことを書いた。よい教師とは教えるだけでなく、學問に興味を覚えさせる者でなければならぬ。また、語法だけでは語学の教師はつとまらない。文意を正しく把えるには広い識見が必要である。

それ故、俸給の額も考えずに本を買ひ込み、毎夜明け方近くまで読みふけた。大意は以上である。このような教師こそ良師であり、しかも、このような人は論文の数を競つたりはしないものである。また、教室外で予科生に親身に接しては論文を書く暇もないのである。

大学の歴史を調べるとりつぱな学生についてはなんの記録も見られない、という言葉もあるが、端正勤勉な理想的学生は常に存在したのである。あるいはまた、二十歳前後の青年は、無限のかなたを見つめ、虚無を感じ、實在を求めるのであつた。ちなみに予科生の年齢は現在の高校三年生と大学一、二年生のそれに相当する。授業を欠席して哲学、文学を読みあさり、人生を語り合う学生も少なくなかつた。これらさまざまな個性に接し、その長所を見てと

り、常に相談相手となったのが予科の教師である。新制大学発足の時、学生に正面から対応する教師の姿勢を、北大は切り捨てたのであった。資格審査問題で宇野予科長の怒りは心頭に発したと推察される。「進歩派には得意そうな論理はあったが、きびしいモラルの欠如を感じた」と書き残しているし、予科終校式で来賓として祝辞を述べ、人間性への畏敬を説き、「いま、一部の人々が進歩の名においてまきおこすホコリによって大学が汚されることを憤り、悲しむ」と強調したという。宇野予科長は後事を少数の信頼する人々に託して北大を去った。改革に長所と短所が伴うのは常のことである。この時の改革にも賛否両論があった。真の評価はその後の教養部のあり方から下されることになる。

予科
外人教師ヘルマン・ヘッカーは慈愛のまなざしで予科生に接し、戦後は文学部の講師として、北大に三五年間在職したが、一九六五年（昭和四〇）、北大での講演の中で「戦争がすんで私たちの予科はいたましくも廃止されてしまいました」（unsere Yoka schmerzlich aufhörte）と言及し、愛する北大がいつまでも「人間性の学校」（Menschlichkeitsschule）であることを忘れないでいただきたいと結んでいる。この願いは宇野親美のそれと同じであり、青葉萬六の、人間を見失ってはならぬという教えにも共鳴する。かつて予科に学んだ者はこの教えを身につけて巣立っていったのである。

一九七六年（昭和五一）北大百周年の祝典は盛大に举行された。この祝典に結集した同窓生の多くは、ありし日の予科生活を胸に抱いてこそ、協賛したのである。祝典の前日、九月十四日の夜、体育館での記念寮歌祭は在学生同窓生一体となつての盛り上がりを呈し、ストームと「都ぞ弥生」の合唱において最高潮に達した。まさに予科あってこそその祝典であったと言える。東京同窓会から寄贈寮歌二つが恵迪寮に贈られた。一九五二年俳人高野素十は北海道を周遊し、北大について「いこうと楡の落葉の降るといふ」という句を作った。楡だけが北大の伝統を伝え残すこ

とになってはならない。

あとがき

各章の「見出し句」の出所は次のとおりである。序のそれは札幌農学校校歌の冒頭、第一章のそれは明治四十五年寮歌「都ぞ弥生」の中から借りた。以下同様に、第二章は大正十一年新寮記念寮歌「かがやく路」、第三章は昭和六年閉寮記念寮歌「別離の歌」、第四章は昭和十三年寮歌「津軽の滄海^{あふみ}の」、第五章は昭和二十一年寮歌「時潮の波の」、そして結のそれは昭和二十二年寮歌「暁の渚^{さか}離りて」から借りた。

主要文献を列挙する。人事記録、各種簿冊、官報、大学一覽、職員住所録、学生生徒便覧、文武会紹介、恵迪寮史、寮報、寮務日誌、桜星会雑誌、桜星会文芸部史、桜星、北大季刊、各運動部部史・部報類、陸上競技インターハイ廿三年史（蛭川幸茂）、応援団史、札幌遠友夜学校、各種新聞、思い出の七十年（原田三天）、白聖校舎の新しきころ（鈴木限三）、真なるもの・青葉先生とその弟子（葛西義範）、朝の食卓（宇野親美）、藤女子大学・国文学雑誌（宇野親美教授追悼）、宇野親美遺稿（宇野芳子）、医学部五十年史、工学部五十年史、写真集北大百年、クラーク精神と北大東京同窓会三十年の歩み、都ぞ弥生、環^{*}珞^{*}みがく、写真集都ぞ弥生（*印は東京同窓会刊行）。

全国に散在される三十数人のかたがたから御教示を受け、資料を寄せられたが、芳名は略させていただく。敗戦後の変則学年暦を回復できたのは、石川武、西田恒久両氏の尽力による。図書館北方資料室の秋月俊幸氏と事務局庶務課、人事課のかたがたに何かとお世話になった。明峯俊夫名誉教授の御教示に終始支えられて、ようやく脱稿に至った。

敗戦後の混乱の中で、急激な学制改革によって消滅した予科について、予科関係資料を一括して保存する企画もなく、保存機関も存在しない。本稿は限られた期間内にまとめた最初の予科史であるにすぎない。水野一が執筆し山元周行、東出功がこれを助けた。

（水野 一）

課 程 表 A (数字は毎週の授業時数)

学年 学科目	1 年	2 年	3 年
倫 理	不 定	不 定	1
国 語	3	—	—
第 1 外国語	10	9	6
第 2 外国語	6	5	3
数 学	5	4	3
測 量	—	3	—
物 理 学	—	3	3
化 学	—	3	講義 3 実験 2 5
植 物 学	—	—	講義 2 実験 2 4
動 物 学	—	—	講義 2 実験 2 4
地質及鉱物学	—	—	2
図 画	4	4	—
兵 式 体 操	3	3	3
計	31	34	34

備考 第 1 外国語へ英語又へ独語トス第 2 外国語へ独語又へ
英語トシ随意科目トス

課 程 表 B

学年 学科目	1 年	2 年	3 年
倫 理	1	1	1
国 語	3	—	—
独 語	9	8	5
英 語	6	6	4
数 学	5	3	3
測 量	—	2	—
物 理 学	—	3	3
化 学	3	3	実験 2 2 講義 2 2
植 物 学	—	1	講義 2 4 実験 2 2
動 物 学	—	—	講義 3 5 実験 2 2
地質及鉱物学	—	—	2
図 画	2	3	—
兵 式 体 操	3	3	3
計	32	33	32

一
課
程
表付
録

課程表 C

学 年		1 年	2 年	3 年
学科目				
修身		1	1	1
国語及漢文		4	2	—
第1外国語		8	6	6
第2外国語		(4)	(4)	(4)
数学		4	4	4 (2)
物理		—	3	講義 ³ 実験 ² 5
化学		—	3	講義 ³ 実験 ² 5
植物及動物		2	2	(講義 ² 実験 ² 4)
鉱物及地質		2	—	—
心理		—	2	—
法制及経済		2	—	—
図画		2	2	(2)
体育		3	3	3
計		28 (32)	28 (32)	28 (32)

第3学年ノ数学(2)及図画(2)ト第3学年ノ植物及動物(講義2実験2)トハ生徒ヲシテ其ノ一ヲ選択セシム

第1外国語ハ英語トシ第2外国語ハ独語トス但シ志望ニヨリ独語ヲ第1外国語トシ英語ヲ第2外国語トスルコトヲ得

前項ノ場合ハ左ノ教授時数ニ依ル

学 年		1 年	2 年	3 年
学科目				
第1外国語		10	9	9
第2外国語		(3)	(3)	(3)

第2外国語ハ随意科トシ之ヲ履修セサル者ニ対シテハ便宜他ノ授業ヲ施スコトアルヘシ

課 程 表 D (変更部分のみを掲げる。課程表C参照)

学 年 学科目	1 年	2 年	3 年
第 1 外 国 語	8	6	6
第 2 外 国 語	4	4	4

第1外国語ハ英語トシ第2外国語ハ独語トス但シ志望ニヨリ独語ヲ第1外国語トシ英語ヲ第2外国語トスルコトヲ得

前項但書ノ場合ニ於ケル教授時数ハ左記2表ノ1ニ依ル

第 1 表

学 年 学科目	1 年	2 年	3 年
第 1 外 国 語	10	9	9
第 2 外 国 語	3	3	3

第 2 表

学 年 学科目	1 年	2 年	3 年
第 1 外 国 語	9	8	8
第 2 外 国 語	4	4	4

課 程 表 E

学 年 学科目	農 類 医 類		工 類 理 類	
	1 年	2 年	1 年	2 年
道 義 科	35	35	35	35
人 文 科	130	65	130	65
数 学 科	200	100	230	230
物 理 科	100	165	130	200
化 学 科	100	165	100	165
博 物 科	130	165	35	65
外 国 語 科	265	265	300	200
教 練 科	200	200	200	200
体 鍊 科	65	65	65	65
計	1,225	1,225	1,225	1,225

課 程 表 F

学 年 学科目	1 年		2 年		3 年	
	必 修	選 修	必 修	選 修	必 修	選 修
倫 理 科	1		1		1	
人 文 科	2	4	2		2	
第1外国語科	3	2	3	2	3	
第2外国語科	6		5	2	5	
数 学 科	4	2	4		4	2
物 理 科	2		3	2	4	2
化 学 科	2		2	2	3	2
生 物 科	2		2	2		4
地 学 科	2		2			
図 学 科	2				2	
体 育 科	2		2		2	
計	28	8	26	10	26	10

本表ハ毎週授業時数ニシテ選修科目ハ2時間ヲ以テ1単位トス

二 歷代予科教官名簿

予科主任心得
予科主任

予科主任

予科長

予

科

予科主任

修身(倫理)

論理
心理
哲學

法制

青葉萬六	一九〇七・九一六・九
溝淵進馬	一九〇八・九一二・八
渡辺又次郎	一九一二・九一六・三
渡辺又次郎	一九〇八・四一〇・四
青葉萬六	一九〇〇・四一三・二
三田村孝吉	一九三三・二一四・三
藤原正	一九三四・三一四・一
服部品吉	一九〇〇・一四一・二
宇野親美	一九四一・二一四・七
明峯俊夫	一九〇九・八一六・三
溝淵進馬	一九〇八・九一二・八
渡辺又次郎	一九一二・八一六・四
藤原正	一九〇〇・七一四・一
富永義彦	一九〇〇・三一四・一
佐藤清太郎	一九〇九・九一〇・二
清水栄長	一九〇四・四一四・〇
真方敬道	一九〇六・八一四・三
古田惇二	一九〇六・九一六・三
謝花寛濟	一九三三・四一三・八
伊部栄治	一九三三

經濟
歷史

國語・漢文

瀬谷信義	一九〇四・九一六・八
松野孝太郎	一九〇六・九一六・三
佐藤昌彦	一九〇六・九一六・三
曾我孝之	一九三三・八一四・三
和田英夫	一九〇七・四一四・三
蝦名賢造	一九〇七・〇一五・三
辻村正吾	一九〇六・二〇一・六
北村文治	一九〇七・八一四・五
新居敦二郎	一九〇七・九一二・三
星野彬	一九〇二・三一四・〇
岡田秀夫	一九〇四・九一六・二
手塚良道	一九〇六・二一九・七
小西兵太郎	一九〇九・九一五・七
石山徹郎	一九〇〇・八一三・三
樟本成美	一九〇三・四一四・三
中村己美夫	一九三三・〇一四・九
宇野親美	一九〇四・九一四・〇
服部品吉	一九〇五・八一四・二
西村稔	一九三三・四一四・九
八木沢元	一九〇〇・三一四・六

英語

森本厚吉	一九七・九〇・六
高杉榮次郎	一九七・九一・九
有島武郎	一九七・三一・五・三
木村勇	一九〇・八一・三・九
末光信三	一九五・九一・〇・〇
小谷武治	一九〇・八一・七・三
和田楨純	一九〇・九一・五・二
大河原精一郎	一九三・八一・三・五
都築東作	一九三・四一・四・三
齋藤護国	一九三・五一・五・三
広橋浩	一九三・七三・七
浅井綱雄	一九三・七三・五・三
萩原清次郎	一九五・四一・四・三
大野三千右衛門	一九三・四一・四・三
吉田龍男	一九三・八一・四・三
篠田成之	一九四・三一・七・〇
安保常治	一九四・四一・四・三
伊藤整	一九四・四一・四・九
本堂正夫	一九四・四一・四・六
高野仁太郎	一九四・六一・四・三
川村米一	一九四・七一・四・六
高橋保郎	一九四・九一・四・六
中川時代	一九四・四一・五・三
丹治敏衛	一九四・三一・五・三

独語

齋藤米蔵	一九七・九一・九・一
武田久吉	一九七・九一・九・二
秋元喜久雄	一九七・九一・〇・八
吹田順助	一九七・九一・五・九
近藤清作	一九九・二一・三・九
佐人間政一	一九〇・九一・四・八
金元佑啓	一九三・八一・二・七
山田鉦太郎	一九五・二一・六・一
成田秀三	一九五・二一・三・三
犬塚一郎	一九〇・〇一・三・七
青山延敏	一九三・五一・四・九
羽鳥又次郎	一九三・〇一・四・三
小川泰	一九三・四一・五・五
吉崎十七	一九三・四一・五・三
東新	一九三・四一・四・三
中島篤	一九五・四一・五・三
横岡雅雄	一九六・四一・五・〇
結城謙治	一九三・四一・四・八
鈴木エルナ	一九三・四一・四・四
大野勝治	一九四・二一・四・六
田内静三	一九五・二一・五・三
川島琢治	一九六・三一・四・三
柴田治三郎	一九四・三一・四・九
原俊彦	一九四・三一・四・六

数 学

津村 浩三	一九四・三一四・三
横溝 政八郎	一九四・三一四・六
山岡 直道	一九四・八一四・四
中野 久一	一九四・九一四・一
平野 他喜松	一九七・九〇八・〇
三田村 孝吉	一九七・九一四・三
鈴木 庄治郎	一九七・九一四・〇
玄地 誠輔	一九八・二〇三・五
岩瀬 喜作	一九八・二〇三・三
山鳥 藤治郎	一九三・四一四・五
朽木 十吉	一九三・四一四・三
若林 善作	一九三・二〇一・八
森 金之助	一九三・二〇一・三
河端 梁雄	一九五・四一四・七
高橋 丑治	一九六・四一四・六
渡辺 信夫	一九三・四一四・八
稲垣 武	一九四・九一四・三
大槻 富之助	一九四・三〇四・〇
水口 彦太郎	一九四・三〇四・六
井上 弘	一九四・三〇三・三
藤田 正美	一九四・四一四・四
紺野 正平	一九四・三〇四・六
江本 淡也	一九四・九一四・九
関川 巖	一九四・九一四・四

化 学

物 理

秋山 隆二郎	一九四・八一四・六
奥村 敬次郎	一九四・二〇四・八
荒又 秀夫	一九四・二〇四・一
丸山 巖	一九四・六一四・五
松本 夏雄	一九四・三一四・三
中島 甲臣	一九四・九一四・〇
山元 周行	一九四・六一四・三
青葉 萬六	一九四・九一四・三
野附 雄次郎	一九四・七一四・四
渡辺 吾吉	一九三・三一四・三
小山 民造	一九三・二〇一・六
菊地 知	一九四・六一四・九
千田 朝慎	一九四・四一四・五
小林 種樹	一九六・二〇四・三
今堀 克己	一九六・九一四・九
梅津 藤市郎	一九三・五一四・〇
林 正一	一九三・五一四・六
小宮 英太郎	一九四・六一四・五
山本 隆男	一九四・二〇四・二
水谷 寛	一九四・九一四・六
辻 卓爾	一九四・九一四・八
武原 熊吉	一九四・九一四・四
松野 貞	一九四・三一四・三
谷井 増甫	一九三・四一四・一

生物

中島 富太郎	一九三・七一五・一
池田 福海	一九三・三一七・三
佐藤 久次	一九三・四一六・六
小松 三郎	一九五・一七
芳村 五左衛門	一九五・一一〇・〇
村上 玉樹	一九六・六一七・二
坂元 義男	一九六・四一〇・六
高岡 道夫	一九六・二一四・四
中山 忠照	一九六・二一四・七
入江 遠	一九四・四一〇・六
高橋 義勝	一九四・七一七・二
鰐淵 武雄	一九四・〇一〇・七
若山 誠治	一九六・三一〇・六
養目 清一郎	一九六・九一〇・〇
野村 益太郎	一九九・七一三・三
並河 功	一九九・七一四・七
鈴木 限三	一九三・一四三・二
新谷 武衛	一九三・三三三・七
新庄 巍	一九三・四一六・八
山口 英二	一九六・六一〇・三
青木 肇	一九六・九一四・三
伊藤 秀五郎	一九六・九一四・四
村松 康	一九六・二一四・七
吉村 文五郎	一九四・九一五・八

地鉾

測量・図画

兵式体操

明峯 俊夫	一九四・二一五・三
石塚 星郎	一九四・三一八・三
三戸 芳雄	一九四・七一四・三
金木 藤雄	一九四・三三〇・三
大谷 吉雄	一九四・二一〇・六
三上 助	一九四・四一〇・三
久佐 守	一九六・五一〇・六
大井上 義近	一九〇・四一三・〇
夏間 純亮	一九〇・三三三・三
中尾 清蔵	一九三・二〇一・七
田上 正敏	一九三・四一四・九
石橋 正夫	一九四・二一四・五
橋本 誠二	一九四・二一〇・六
池田 嘉吉	一九七・九一〇・七
中根 孝治	一九三・五一五・三
土佐林 義雄	一九三・四一〇・五
大山 於菟治郎	一九四・四一〇・七
三宅 保太郎	一九三・五一三・五
軍曹 鈴木 貞三郎	一九七・九一三・九
少佐 内海 虎雄	一九七・九一四・二
軍曹 津田 広助	一九七・九一六・三
中尉 山内 義人	一九七・九一六・六
少尉 小西 富蔵	一九〇・八一八・〇
大尉 千葉 磨	一九四・六一九・二

Ian Ernest Macleay Morrison
 ボーリン・ローランド・システア・レーン

一九〇・九一七・九
 一九七・九一四・三

Hermann Hecker
 Lolf Henkl

一九〇・八一四・三
 一九三・八一四・七

独語外人教師

Hans Koller

Willy Kremp

Arnold Gubler

一九八・七一五・三
 一九三・八一〇・六
 一九三・四一四・八
 一九五・八一三・七

(注) この名簿は教授、助教授、講師等の別を問わず、予科教師を本務とした歴代教師という基準におおむね準拠して作成した。

三 予科卒業及び修了者数

(注) 一九二九年三月より卒業を修了と改められた。

卒業及び修了の年月

卒業及び修了者数

一九〇八・七
 一九〇九・七
 一九一〇・七
 一九一一・七
 一九一二・七
 一九一三・七
 一九一四・七
 一九一五・七
 一九一六・七
 一九一七・七

三六
 二九
 四八
 七二
 八〇
 七六
 六三
 七七
 六二
 七〇

一九一八・七
 一九一九・七
 一九二〇・七
 一九二一・三
 一九二二・三
 一九二三・三
 一九二四・三
 一九二五・三
 一九二六・三
 一九二七・三
 一九二八・三
 一九二九・三
 一九三〇・三

八〇
 七九
 八三
 八一
 一三八
 一七三
 一七三
 二五四
 二五六
 二七三
 二五五
 二六〇
 二八九

計	一九五〇・三	一九四九・三	一九四八・三	一九四七・三	一九四五・三	一九四四・九	一九四三・九	一九四二・九	一九四二・三	一九四一・三	一九四〇・三	一九三九・三	一九三八・三	一九三七・三	一九三六・三	一九三五・三	一九三四・三	一九三三・三	一九三二・三	一九三一・三
---	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

九六六六	四四一	四三八	五六一	三九八	四一四	三九八	三八八	三三八	二九九	二八四	二八一	二九七	二六五	二七〇	二八〇	二七二	二六九	二五七	二五一	二五八
------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

年 表

12・10	9・4	7・4	6・1	11・19	9・6	9・1	8・	7・	4・8	4・2	2・	1907	1905	7・10	10・	1899
予科講堂落成（前年着工）	溝淵進馬予科主任となる	予科第一回卒業生三六人を送り出す	寮の自炊制度発足	寮の入舎退舎の決定は寮委員会に一任される	青葉萬六予科主任心得となる	東北帝国大学農科大学発足、新入学予科生一〇三人	寮は本科生予科生のみ収容することとなる	予科規則を定める	最初の寮歌「一带ゆるき」を作る	寄宿舎名を恵迪寮とする	学生生徒保証人制度廃止	（明40）	（明38）	（明36）	（明32）	（明32）

4・1	12・20	1917	1916	9・12	4・8	4・8	4・8	10・4	9・11	9・11	1911	1909
北海道帝国大学発足	寮の購買自営制発足	寮歌集発行（橋本左五郎、有島武郎の序文を載せる）	寮歌「都ぞ弥生」発表される	寮内誌『辛夷』第一号発行	『辛夷』第五号発行（これが終刊号）	この年、予科生の帽子に白線三条を付す	学科課程改正され、随意科目として歴史、論理、ラテン語が加わる	渡辺又次郎予科主任となる	学科課程中、倫理を修身と改める	英独二カ国語必修となる	（明44）	（明42）

4・1	予科主任を予科主事と改称、渡辺又次郎予科主事となる
一九一九(天8)	寮内誌『恵迪』第一号発行
6・1	予科生徒定員増。英語を第一外国語とする者八〇人、独語を第一外国語とする者一二〇人、計二〇〇人となる
7・	
8・15	予科校舎増築落成(一九一七年九月着工)
8・20	南寮一棟増築(従来南寮を中寮と改称)
9・11	学科課程改正。測量、論理、ラテン語が消え、心理、法制経済が加わり、兵式体操は体操となる
一九二〇(天9)	桜星会歌「瓔珞みがく」が作られる
3・	青葉萬六予科主事となる
4・19	桜星会会則改正。会費を徴収し各部の活動費に充てる
9・1	
一九二一(天10)	桜星会雑誌『とどろき』第一号発行(翌年十月一日発行の第四号から『桜星会雑誌』と改称)この時から学年開始期四月一日となる
3・7	寮の記念祭公開を始める
4・1	予科校舎増築落成(一九二〇年八月着工)
5・8	新寮一棟増築
6・26	
10・20	
一九二二(天11)	予科生徒定員増。農学部進入希望者一二〇人(英語を第一外国語とする者八〇人、独語を第一外国語とする者四〇人)、医学部進入希望者八〇人、工学部進入希望者一二〇人、合計三二〇人となるこの年、応援団結成される(ただし有志参加のもの)
4・	寮は予科生のみを収容することになる
一九二二(天12)	北海道帝国大学附属大学予科を北海道帝国大学予科と改称
5・15	
6・16	
一九二三(天13)	農学部進入希望者はすべて英語を第一外国語とすることに改まる
4・	寮の購買自営制崩壊
一九二四(天14)	雨天体操場、銃器室移転改築
5・12	
10・30	
一九二五(天15)	独語外人教師ハンス・コラー急逝
1・28	陸軍現役将校学校配属令公布
4・11	
一九二六(天16)	農、医、工の各学部に進む者を、それぞれ予科一類、二類、三類と呼称
4・	寄宿舎規定改正され、予科生のみ寮であることが明示される
10・1	
一九二七(天17)	寮の自炊制度崩壊
2・9	予科教室、化学実験室改築さる(一九二六年十月着工)
3・30	この年、応援団団則制定され、全予科生を団員とする

10・26	7・1	6・10	5・18	2・10	2・10	11・21	10・17	5・1	3・30	4・10	1930 (昭5)	3・1	2・1	12・10	12・7	12・6	1928 (昭3)	—
除名二人、停学一年間三人、六カ月六人、三カ月	『桜星会雑誌』第二五号発禁	寮のプール完成	停学七日間一人、一〇日間二人	停学二週間一人	三田村孝吉予科主事となる	新恵迪寮開寮	財政緊縮政策により官立大学の予科、専門部廃止案が出されたが実施に至らず	『寮報』第一号発行	予科武道場落成（一九三〇年八月着工）寮移転のため閉寮	生徒担任制度（通称、個人担任）発足	この年、第一学期に寮生章制定される	諭旨退学三人	予科卒業を予科修了と改める	応援団が『桜星会部報』第一号を発行	寮は盟休から離脱	予科生除名一人、停学一人	全学的同盟休校に入る	する

1933 (昭8)	七人、譴責二人、訓戒一人、諭旨退学二人
3・26	寮の自炊制度復活
11・21	『恵迪寮史』刊行
1934 (昭9)	寮の購買部自営制復活
9・1	『桜星会雑誌』第三三号発禁
11・10	藤原正予科主事となる
12・27	(昭10)
1935 (昭10)	官報に農類、医類、工類の呼称が現れる
4・	(昭11)
1936 (昭11)	元予科主事青葉萬六胸像除幕式
6・29	この日から九日まで陸軍大演習に行幸あり。これを機に予科生全員五分刈り頭となる
10・1	
1937 (昭12)	
1・	桜星会会則改正により応援団は桜星会の組織内に入れられる。『桜星会部報』にかえて『桜星会会報』『桜星会時報』を発行することとなる
3・5	予科新館落成（一九〇八年に建てられた校舎の建て替え。一九三四年八月着工）
5・29	『桜星会文芸部史』刊行
3・30	第三十回記念祭（5・30）、改訂寮歌集発行（青葉萬六の序文を載せる）
6・	休学二人（事実上の停学処分）
7・7	日中戦争勃発
	寮は秋の恒例行事定山溪旅行を中止

一九三八(昭13)	4・1	学科課程改正され、英独二カ国語必修となる。農類の第一外国語を独語とする
5・		除名四人
7・10		この年から記念祭の公開をやめる
9・7		集团的勤労運動実施される(7・12)
一九三九(昭14)		同右(9・9)
7・		勤労作業として学内排水溝掘りを行う
9・25		桜星会の校外寮「支笏寮」開寮
10・22		寮の定山溪旅行で芝居を強行
11・22		右の件で委員は最高二週間の停学処分
一九四〇(昭15)		
1・30		服部品吉予科主事となる
3・		入試期日を官立高校と同時とする
4・1		再入学規程を設ける
5・16		予科主事を予科長と改称
5・20		二、三年生皇紀二千六百年記念植樹
5・25		一年生同右
10・15		桜星会三十周年記念式典挙行
10・16		寮の支笏湖旅行(一九四二年秋まで実施)
12・20		寮の第一期幹事会発足し、第二期委員会より事務を引き継ぐ
一九四一(昭16)		
1・9		『桜星会雑誌』第五一号発行
2・6		文武会解散、報国会「全学会」発足
2・6		桜星会解散、桜星報国会発足し「全学会」の分会となる。各部は「班」と改称
4・		予科理類(定員八〇人)第一回生入学、予科生徒定員、計四〇〇人となる
5・25		記念祭(非公開)にあたり再改訂寮歌集発行(伊藤秀五郎の序文を載せる)
5・26		外国人留学生入学規程を設ける
12・8		太平洋戦争開戦
一九四二(昭17)		
2・		『桜星』第一号発行
7・		英語外人教師ハロルド・M・レーン夫妻帰国
9・30		一九四〇年四月入学者の繰り上げ修了
一九四三(昭18)		
1・20		『恵迪寮小史』刊行
3・		東京試験場での受験はこの年をもって中止
6・25		クラーク胸像献納式。予科理類二年の有志これを隠さんとする
7・27		樺太での勤労作業に出発
8・		この月の前半、樺太上敷香気屯陸軍飛行場造成作業。一夜、農類二年大西誠一急逝(本学初の報国会葬)
9・30		一九四一年四月入学者の繰り上げ修了
12・20		鈴木限三教授退官
一九四四(昭19)		
4・1		規則改正、修業年限二カ年(一九四三年四月入学者より適用)となり、学科課程一変し教練科が独

1951 10	3 31	3 30	2 18	1950 10	8 22	7 31	4 3	2 3	1949 10
(昭26)		(昭25)		(昭25)		(昭24)		(昭24)	
支笏寮は桜星会より北大本部会計課へ移管される		予科最終修了者のために送別晩餐会を行う		予科最後の運動会。この時、非公開の記念祭		伊藤誠哉学長、予科長を兼任（予科消滅まで）		授業開始	
		予科最終修了式（予科終校式）、四四一人を送り出す。午後三時より桜星会主催の予科閉校記念別離会				明峯俊夫予科主任となる		予科運動部は北大体育会に属す	
		予科消滅							